

大学

2022 年度  
「卒業生満足度調査結果の検討」

大学院

2022 年度  
「修了生満足度調査結果の検討」

大阪電気通信大学

教育開発推進センター

Center for Educational Development(CED)

# 目次

## 大学

大学全体：集計結果	3
2022年度「卒業生満足度調査結果の検討」	5
工学部	
電気電子工学科	6
電子機械工学科	10
機械工学科	13
基礎理工学科	15
環境科学科	16
建築学科	19
情報通信工学部	
情報工学科	21
通信工学科	23
医療健康科学部	
医療科学科	26
理学療法学科	29
健康スポーツ科学科	30
総合情報学部	
デジタルゲーム学科	31
ゲーム&メディア学科	32
情報学科	34
共通教育機構	
人間科学教育研究センター	36
英語教育研究センター	40
数理科学教育研究センター	41

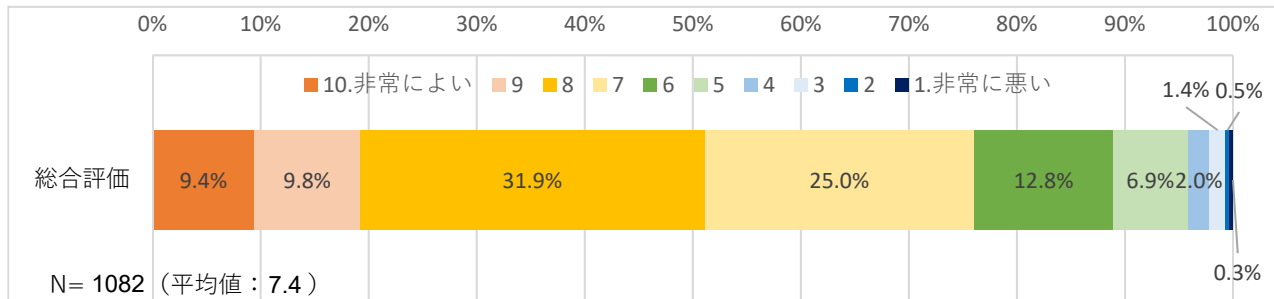
## 大学院

大学院全体：集計結果	45
2022年度「修了生満足度調査結果の検討」	47
大学院 工学研究科	
先端理工学コース	48
電子通信工学コース	49
制御機械工学コース	50
情報工学コース	51
大学院 総合情報学研究科	
デジタルアート・アニメーション学コース	52
デジタルゲーム学コース	53
コンピュータサイエンスコース	54
大学院 医療福祉工学研究科	
医療福祉工学専攻	55

## 2022年度 卒業生満足度調査

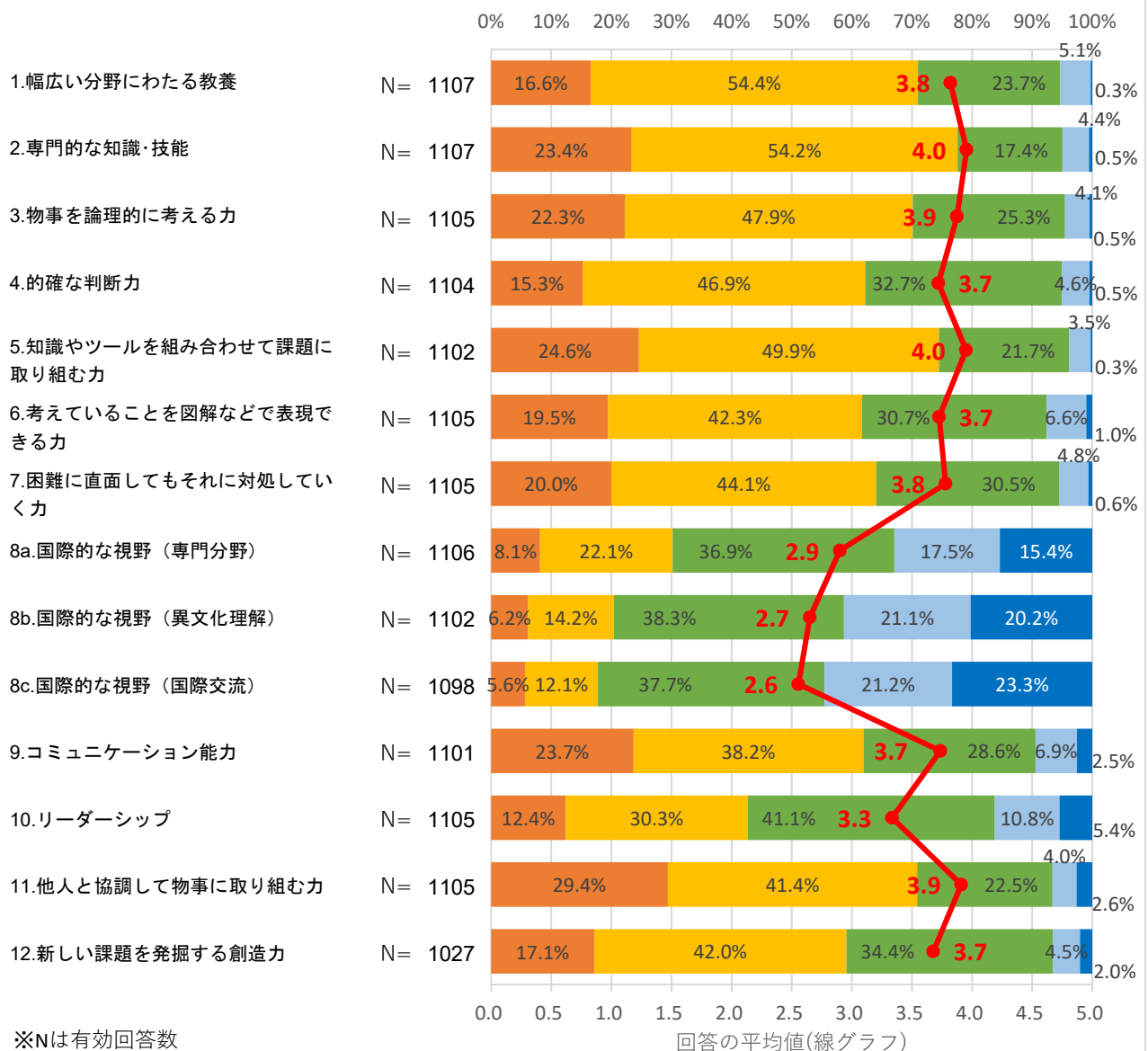
大学全体：集計結果

◆あなたが本学で経験した教育について、全体として考えて、総合評価を1～10の10段階で評価してください。



■5.十分獲得した ■4.ある程度獲得した ■3.どちらとも言えない ■2.あまり獲得していない ■1.獲得していない

選択肢別の割合(棒グラフ)



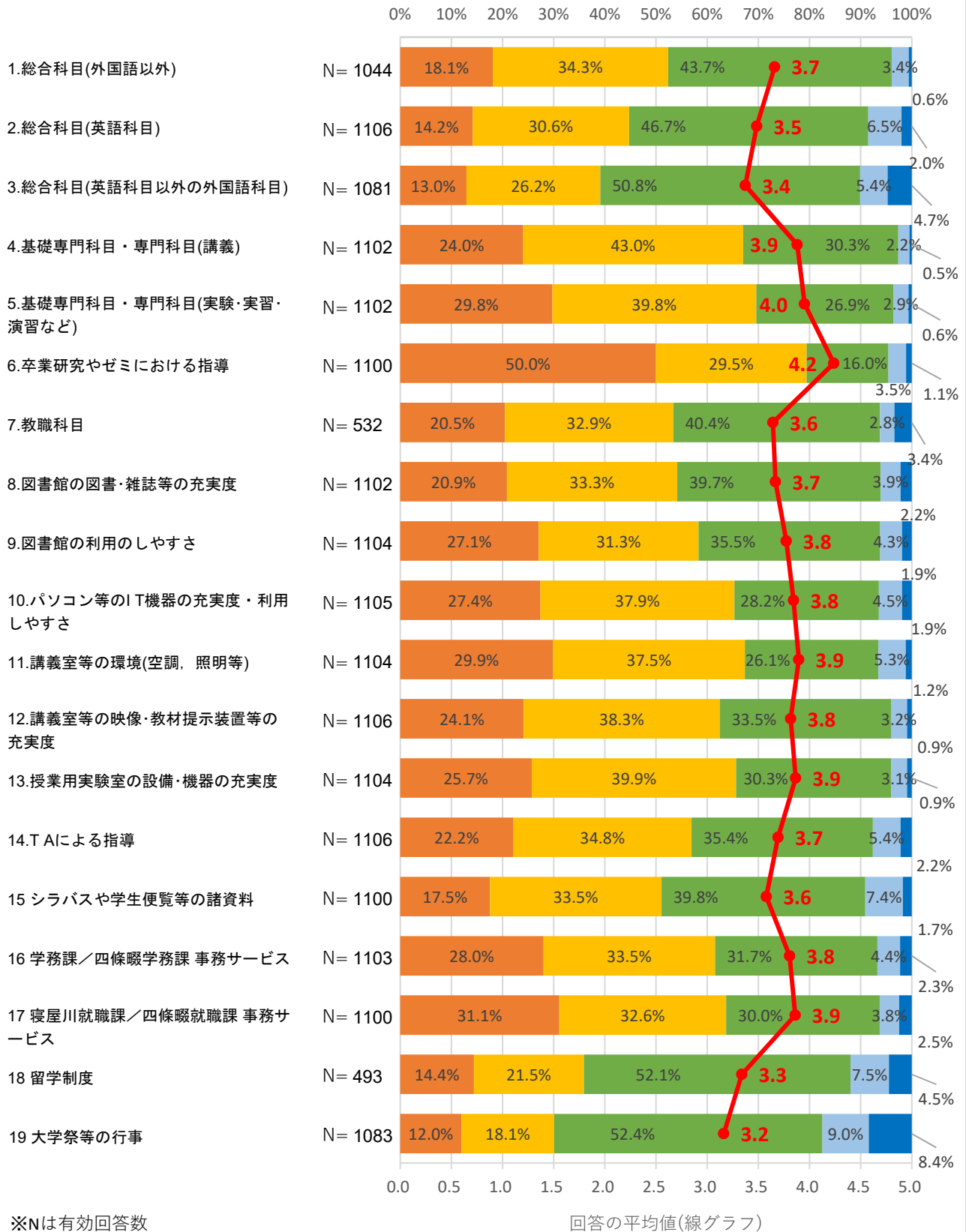
## 2022年度 卒業生満足度調査

大学全体：集計結果

◆本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。

■ 5.よかった ■ 4.ややよかった ■ 3.ふつう ■ 2.やや悪かった ■ 1.悪かった

選択肢別の割合(棒グラフ)



大学

2022 年度

「卒業生満足度調査結果の検討」

## 2022 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2023 年 5 月 25 日

工学部電気電子工学科

2022 年度主任 松浦 秀治

設問ごとに回答を整理し、検討した結果を以下に示す。

### 選択式設問

[A]本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？

電気電子工学科の教育で修得してもらいたいと考えていた、

「専門的な知識・技能」

「物事を論理的に考える力」

「知識やツールを組み合わせて課題に取り組む力」

「考えていることを図解などで表現できる力」

「新しい課題を発掘する創造力」

に対して、昨年度より改善され、高い評価を得られた。さらに、

「他人と協調して物事に取り組む力」

に対しても、昨年度同様に高い評価を得られたので、本学科の教育方針が学生に浸透していることが確認できた。今後も、しっかりと教育していくつもりである。

一方、

「国際的な視野」

「リーダーシップ」

に関して評価が低い、社会では重要な項目であるため、プロジェクト活動科目等を介して、しっかりと教育できる方法を検討する必要がある。

[B]本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。

大学教育で最も重要である

「卒業研究やゼミにおける指導」

に対する評価が昨年度より改善され、かなり高評価を得た。少数での教育・研究が大学生活に重要であることがわかり、今後もしっかりと卒業研究を指導する必要があることを実感した。

また、

「基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」

「授業用実験室の設備・機器の充実度」

も、昨年度より改善され、高く評価されているので、学生は専門科目の重要性を理解し、それに応えられる教

育が行えていることが分かった。今後も専門科目の教育を充実し、社会のニーズに応えられる教育をしていく。

一方、

「TAによる指導」

の評価が下がっていて、これはコロナの影響で2年次から遠隔授業が増えた結果と考えられる。今後は対面授業を中心に行うことで、年齢差のないTAが学生の目線から学生の疑問に直接答えられるようになるので、改善されると考えている。

[C]あなたが本学で経験した教育について、全体として考えて、総合評価を1～10の10段階で評価してください。

[A]の合計の平均は昨年度と同じであるが、[B]の合計の平均は改善されている。その結果、全体としての評価である[C]の平均は、昨年度より改善されている。さらに、教育に関して満足してもらうために、各項目に関して検討する。

#### 自由記述設問

満足している点

##### 1. 思考力に関する項目

「実習、卒研で何かしら失敗したとしても適切な指導を行ってもらい、それを経験として取り入れることができました。」

「校内のサポートも手厚く、疑問の解消だけでなく、思考の発展につなげることができた。」

「卒業研究での活動は、知識面以外にも、物事を考える力や表現する力が身についたと感じている。」

この項目は、大学教育で最も修得してもらいたいことであり、このことに関して学生が気づいたことが分かった。さらに多くの学生が思考力を身につけることができる教育を試みるつもりである。

##### 2. 資格取得に関する項目

「資格取得のサポートが充実していた。」

「資格の援助が手厚い。」

「シーケンス制御や、電気工事工などの実技が必要な資格試験の勉強の際、手厚い補助があり、とてつもなく感謝しております。」

「資格取得講座の手厚い指導をしていただいた点。電力系が苦手だった私にとって、実技試験はとてつもないハードルが高いものでした。ですが、先生方のおかげで、楽しく、学習ができたと感じています。」

電気電子工学科では、「第三種電気主任技術者試験」、「第一種・第二種電気工事士」と「二級・三級電気機器組立て技能士(シーケンス制御作業)」に関して、教員が担当しているが、学生から評価されていることがわかった。今後も資格取得支援講座を行っていくつもりである。

### 3. 教育指導に関する項目

「専門的な分野で適切な指導をいただいた。」

「わからないことがあった時、教員や TA の方のわかりやすい指導のおかげで理解できた事があって良かったです。」

「電気の基礎や応用の部分を実用的に使われている例も含め勉強していけて身につくことができた。」

「学びたい事だけ学べる専門性の高さ」

「専門的な事を長期的に学ぶことが出来、身に付けることができた。」

「親しみやすい教員が多く、質問などもしやすくよかった。」

「専門的な分野は非常に充実していると感じた。」

「教員のサポートが手厚く、最後まで、生徒に寄りそって指導して頂いたことがとても良かったです。」

「専門的な有識者の方が多く、手厚く対応して下さった点。研究室が開放的で、色んな教授や生徒と話し合いが出来、仲が深まりました。」

「専門分野を幅広く学ぶ事ができて良かった。」

「専門的な知識の基礎から応用的なことを幅広く学べたのでよかった。」

専門分野の教育に満足していることが分かり、工学部の特長がしっかりと理解されていることが分かった。また、学びやすい環境であることも分かった。

### 4. 学務・就職関係

「就活等で色々な先生方や就職課の方々に就活の時に色々な話やアドバイスが就活に活かすことが出来たと思いました。」

「就職のサポートが手厚く助かった。」

「学務課や就職課、先生たちのサポートが充実していて、大学生活を送りやすい環境だった。」

「資格支援、就職課からの就活支援」

「電気電子工学の先生たちは就職においても親身になってくださり、大変お世話になりました。」

サポートに満足していることが分かった。

### 5. その他

「コロナ禍で遠隔授業になった中でも、コミュニケーションをとれる友人と出会うことができた。」

上記のほか、友人関係が築けたとの意見があった。今後も重要なことであり、これからも、新入生歓迎合宿等を充実して、友人関係を築ける機会を設けたいと思っている。

また、

「自主的に活動する機会が多く、いままで受け身で生きてきた自分が、自分から行動するようになったので、人として成長することができた。」

との感想があり、大学での本当のキャリア教育ができたと感じた。このように感じる学生を増やすために、より一層の努力を行う予定である。



満足できなかった点

#### 1. 情報伝達に関する項目

「必修科目で情報伝達の方法が不十分なところがあったと感じました。」

「連絡が遅かったり、わかりにくいことが多かった。」

「授業の場所が変更になったときの情報伝達が不十分に感じる時があった。Gmailなどで確認できる仕組みを検討いただきたい。可能であれば授業開始日時の1週間前がありがたい。」

毎年、連絡が遅く、情報内容もわかりにくいと感じている学生が多いことが分かった。掲示板がなくなり、全て MyPortal と OECU メールでの連絡になったのが、うまく伝わらなかったと考えられる。学生が混乱を起こさないように、的確にかつ迅速に情報伝達を行えるように検討する。

#### 2. 対面授業と遠隔授業に関する項目

「遠隔と出席しなければならないのが混ざると大変。」

「遠くで授業で質問の機会が減りしっかりと理解できないことが多くなってしまった。」

「卒研で学校に行く機会が少なく、十分と思えなかった。」

「コロナ禍でオンライン授業になった時に実験もオンラインになったが、実験は自分でやらないと身につかないと思うのでそこを検討していただきたい。」

コロナが収まり、学科の専門科目を対面授業で行えるようになったので、上記の問題は解決されると考えている。

#### 3. 授業に関する項目

「パワーポイントのスライドを用いた講義にて、1ページの量が多すぎるケースがあったので、もう少し簡潔にして欲しい。」

「再履修が増えると他の授業が取れなくなる。」

「余裕を持って単位を取得することの重要性を知らせてほしい。」

「授業で内容が少し重複することがあった。」

「言語分野が弱く感じた。」

「外国語科目のテスト難易度を少し上げた方がいい。」

これらの項目に関しては、随時対応する予定である。

#### 4. その他

「試験日程をもう少しバラけさせてほしい。1日で3科目以上の試験が被っている日は私でも大変でした。」

この点に関しては、キャンパス教務委員会・学務課と相談して、解決策を検討する。

また、

「エレ研の設備がより精度がいいものがほしい。」

に関しては、高度な卒業研究を行うためには必要ですので、優先順位を付けて更新していけるように、エレ研および大学側と相談していく。

今回の卒業生満足度調査での意見を参考に、改善策を検討していく予定である。

## 2022 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2023 年 5 月 16 日  
工学部 電子機械工学科  
2022 年度主任 田中 宏明

- [A] 本学での大学生活をとおして、得た知識や能力
- ・ 2021 年度と比較して0.0~0.4 ポイント下落傾向がみられる。
  - ・ 4.0 以上は 2021 年度には 5 項目であったが、2022 年度は「専門的な知識・技能」の 1 項目に減少している。また、「幅広い専門分野、専門的な知識・技能の習得」などは高評価であり、自由記述からも読み取ることができる。
  - ・ 「国際的な視野」と「リーダーシップ」は例年通り低評価である。
- [B] 本学での生活を振り返り、授業科目群や教育設備・機器
- ・ 全体的に 2021 年度と比較して下落傾向がみられる。
  - ・ 4.0 以上は 2021 年度には9項目であったが、2022 年度は 5 項目に減少している。
  - ・ 「専門科目や卒業研究」、「図書館、PC、実験設備・機器」は高評価であり、自由記述からも読み取ることができる。
- [C] 本学で経験した教育についての総合評価
- ・ 2021 年度の 7.7 から 7.5 と下がっている。
  - ・ 総合評価で6以下と評価した 78 名中の17名 ( $17/78=0.217$ )が全体の評価を引き下げている。

### 自由記述（件数）

#### 【良かった点】

- ・ 幅広い専門分野の教員からの学び(22)
- ・ 卒業研究(14)
- ・ 趣味の合う友人に出会い。友人との交流(11)
- ・ 3D 先端造形加工センター、CADなどの最新の設備とその利用(9)
- ・ 講義や実験・実習(8)
- ・ 就職課のサポート(5)
- ・ 部活/自由工房など(4)
- ・ 教職科目での支援と指導(1)
- ・ プレゼンテーションのスキルの向上(1)
- ・ 図書館(1)
- ・ 総合学生支援センター(1)
- ・ 空調設備(1)
- ・ 資格(1)

#### 【改善すべき点】

- ・ 新棟の空調や環境(7)
- ・ メールやアプリなどの情報伝達が分かりにくい、遅い、不十分(7)
- ・ 開放型の研究室のため周囲がうるさい・集中できない(6)
- ・ 授業の内容や資料(5)
- ・ 新棟の研究スペースが狭い(4)
- ・ 食堂、売店(4)
- ・ 低スペックのPC/古いアプリケーション(3)
- ・ 遠隔よりも対面授業が良い。授業形式の統一(2)
- ・ TAのサポート(2)
- ・ 少ない指導教員(1)
- ・ 緑が少ない(1)
- ・ 研究活動期間が短い(1)
- ・ 設計製図の課題が難しすぎる(1)

- ・ バリアフリー化(1)
- ・ 寝屋川キャンパスの広さ(1)
- ・ 学祭などのイベントの少なさ(1)
- ・ 卒業研究(1)
- ・ 研究費(1)
- ・ 就職活動(1)
- ・ 授業中止の判断が遅い(1)
- ・ 必修科目が多い(1)
- ・ 門限 22 時の延長(1)
- ・ 必修科目の単位数が労力に見合っていない(1)
- ・ 研究室の活動を 17:30 までとしてほしい(1)
- ・ コロナ禍の学費返還(1)
- ・ できない学生に対するプレッシャーをかけられる(1)
- ・ 新棟の完成が無関係(1)

#### 【役立つ/印象に残った科目】

- ・ 電子機械実験/電子機械演習とその他の実験(6)
- ・ 設計製図2(鄭)(6)
- ・ ロボット工学(入部)(5)
- ・ CAD 基礎/CAD 工学/工学基礎製図(新関)(5)
- ・ 設計製図1(田中)(4)
- ・ 材料工学(3)
- ・ プログラミング基礎演習(兼宗)(2)
- ・ 力学(田中)(1)
- ・ 力学(入部)(1)
- ・ メカトロニクス(鄭)(1)
- ・ コンピュータ工学(長瀧)(1)
- ・ 工作法(田中)(1)
- ・ 電磁気学(月間)(1)
- ・ 電子回路(月間)(1)
- ・ 中国語1(王)(1)
- ・ 卒業研究(鄭①、疋田②、入部①、田中①)
- ・ CAD(1)
- ・ 基礎電気回路/電気回路(月間)(1)
- ・ 英語(1)
- ・ プログラミング(1)
- ・ 確率・統計(若林)(1)
- ・ 力学1・演習(1)
- ・ プレゼミナール(疋田)(1)
- ・ スポーツ実習(1)
- ・ 制御基礎論(疋田)(1)
- ・ キャリア入門(1)
- ・ SolidWorks(1)

#### 【大学への要望や提案】

- ・ お礼(9)
- ・ 幅広い多様な知識を学んだ(4)
- ・ 部活/サークル活動の勧め(3)
- ・ 研究室での交流が少ない(2)
- ・ 研究室に助手(1)
- ・ 経営プロジェクト/新商品のプロジェクト(1)
- ・ サークルでの交流ができた(1)
- ・ 研究室のスペース(1)

- ・ 大学祭(1)
- ・ 出会いと経験(1)
- ・ バリアフリー化(1)
- ・ 連絡が遅い(1)
- ・ 四条畷へのバス代(1)
- ・ 自主的に活動できた(1)
- ・ 寝屋川と四条畷キャンパス間の交流が少ない(1)
- ・ アルバイトの斡旋の利便性が悪い(1)
- ・ 専門分野を1, 2年から学びたい(1)
- ・ 文化会の活動が少ない(1)
- ・ 人が少なくて良い(1)
- ・ 学費が高い(1)
- ・ 勉学が苦手な学生に対する配慮(1)

#### 【総評】

2022年度卒業生は、2019年度の入学が大半を占めるが、2020年からの新型コロナの感染拡大の影響を最も受けた学年だといえる。学部の2年と3年の授業を混乱の中で遠隔授業に対応せざるを得ない状況であった。また、4年の卒業研究は新棟移転時期と重複していることが挙げられる。

新型コロナの影響で、遠隔授業と対面授業があり、「情報伝達が分かりにくい、不十分、遅い」などの評価となったと考えられる。また、対人関係も大幅に減りグループワークなども減ったためリーダーシップを発揮する場も減少したことが影響していると考えられる。さらに、国際的な交流は皆無であり、「国際的な視野」の評価はより低くなったと考えられる。

次に新棟移転の影響について、開放型の研究室の利点を述べた自由記述は見当たらず、人の話し声が大きく研究に集中できないなどの意見が多くみられた。

良かった点に関しては、「幅広い専門分野の教員からの学び」、「3D先端造形加工センターの設備」、「実験・実習」、「自由工房」などはより充実・活用していく。

## 2022 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2023 年 6 月 8 日

工学部 機械工学科

2022 年度主任 吉岡 真弥

### [A] 学生が獲得した知識・能力に関する項目について

学生が獲得した知識・能力に関する項目はすべて 3.6 以上の値となっており、特に、「専門的な知識・技能」「物事を論理的に考える力」「知識やツールを組み合わせる課題に取り組む力」「考えていることを図解などで表現できる力」の平均値は 3.8 以上と高い。「専門的な知識・技能」をある程度獲得したと感じた学生が多いようである。講義・実習・卒業研究を通じて学生の社会人基礎力の獲得を目指す学科教員の取り組みが成果として現れたものと考えられる。一方、他者との協調や課題発掘能力については他項目と比較してやや低めの値となっている。これは例年と同じ傾向であるが、「リーダーシップ」については昨年度から 0.4 ポイント上昇しており、学部 3 年次、4 年次における通学、受講、卒業研究等への COVID-19 関係の各種制限の緩和が進んだことにより、他者との関わりの中で実現される教育の成果がある程度現れたものと考えられる。ただし、他者との協調や課題発掘能力については、プロジェクト型教育や卒業研究等を通じてその養成に引き続き注力していく必要があると考えられる。

また、「国際的な視野」を「獲得していない」、「あまり獲得していない」の回答をした人の数が他の項目に比べて明らかに多い。この傾向は、機械工学科だけでなく、工学部全体でも同様になっている。これは、工学部には留学生が少なく、外国人との交流がほとんどないことが学生の評価に現れていると考えられる。学科単独で解決できる問題ではないが、国際的視野および外国語によるコミュニケーション能力は多くの企業でも求められていることもあり、専門科目や卒業研究を通じ、学科としても外国語に触れる機会を引き続き増やす方法を検討したい。

### [B] 授業科目群、教育設備・機器に関する項目について

授業についての評価を見ると、「卒業研究やゼミにおける指導」の評価が昨年度からさらに上昇している。COVID-19 による規制の緩和を受けて、各教員が実施している丁寧な教育・指導が本来の効果を取り戻した結果であると考えられる。「基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」が昨年度より 0.1 ポイント上昇した。自由記述欄の記載に、実験科目を増やしてほしいという意見が一部みられるものの、面接形式での本来の形態で授業を提供できるようになったことが関係していると考えられる。例年の傾向であるが、自由記述からは、機械工学科の多くの学生が、実験・実習や卒業研究で手を動かすことに興味を持っていることが確認できる。実験・実習系授業については効果的な授業方法の検討をこれまでと変わらず続けることが重要と考えられる。

設備関連では、「図書館関係」、「パソコン等の IT 機器の充実度・利用しやすさ」そして「講義室関係」とも全体としては昨年度からわずかに上昇している。大学全体での細かな対応の効果が表れたのではないかと考えられるが、平均値は必ずしも高いわけではないので、引き続きの対応が必要であろう。自由記述欄を見ると、「E.本学で改善すべきと思う点」では 66 件の意見のうち 10 件が、「G.大阪電気通信大学への要望や提案」では 37 件中 3 件が、「研究室間の仕切りがない」構造に対する不満を述べている。共通スペースである学生ラウンジの使用についても、授業の補習であっても「うるさいのでやめてほしい」という意見が複数あ

た。これら研究室態様への不満は新 A 号館を使い始めた 2020 年度の調査から学科を問わず経常的に現れているので、学生ラウンジ部を含めて、学生が集中して卒業研究に取り組める学生研究スペースの環境を大学として整備することが望まれる。

事務サービスについては、わずかであるが前年度からさらに評価が上昇しており、丁寧な対応をいただいた職員の皆様に感謝したい。

#### 総合評価について

総合評価は 2021 年度と同一の 6.9 ポイントであり、昨年度に続いて工学部平均より低いポイントにとどまっている。このため、学科全体で評価結果と自由記述の内容を検討し、教育への取り組みの改善を引き続き図って、学生の満足度を高められるよう努めていきたい。

## 2022 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2023 年 6 月 8 日

工学部 基礎理工学科

2022 年度主任 安江 常夫

本学科は、広範な工学の基盤となる科学(数学・物理・化学)の専門知識を獲得させ、それらを活かす理論や技法を修得させる教育を実践している。これにより、物事を根本的な基本原理から追究・分析する基礎力と真の応用力を持ち、先端科学技術から教育まで、幅広い舞台で活躍できる理数系ジェネラリストの育成を目指している。

卒業生満足度調査においては、[A] 知識や能力の獲得(5 段階評価)、[B] 授業科目や教育設備・機器(5 段階評価)、[C] 総合評価(10 段階評価)の 3 項目について調査結果が公表されている。2022 年度の調査では、基礎理工学科の卒業生のうち 44 名から回答が得られた。2022 年度を含む過去 3 年間の調査結果の平均値の推移を、全学、工学部と比較して表 1 にまとめた。全体的な傾向として、本学科は全学、および工学部と比較して満足度が低い結果となっている。また、2021 年度と同じような傾向が継続しているように見受けられる。

表 1. 卒業生満足度調査のまとめ

項目	2020 年度			2021 年度			2022 年度		
	全学	工学部	本学科	全学	工学部	本学科	全学	工学部	本学科
[A]	3.5	3.6	<b>3.6</b>	3.5	3.5	<b>3.3</b>	3.5	3.5	<b>3.3</b>
[B]	3.6	3.5	<b>3.8</b>	3.7	3.7	<b>3.5</b>	3.7	3.6	<b>3.3</b>
[C]	7.3	7.4	<b>7.1</b>	7.3	7.2	<b>6.5</b>	7.4	7.3	<b>6.8</b>

個々の項目について、詳しく見ていく。[A]の知識や能力の獲得においては、3. 物事を論理的に考える力、4. 的確な判断力、7. 困難に直面してもそれに対処していく力、9. コミュニケーション能力、11. 他人と協同して物事に取り組む力といった、社会人として必須の基礎能力に関しては大学全体あるいは工学部とほぼ同等のポイントであった。これに対して、1. 幅広い分野にわたる教養、2. 専門的な知識・技能が大学全体・工学部と比べて 0.2 ポイント以上低くなっている。これは、基礎理工学科での学びが理数系に偏っており、かつ基礎科学の重要性を謳っているがために工学分野の専門的な学びとは異なっているような印象を与えている結果であると分析できる。基礎理工学科ではこうした基礎科学こそが、広範な工学分野の専門的な知識の基盤であると考えているが、それが学生にうまく浸透していないことを示していると思われる。これをどのように学生に理解させるかが、今後の課題であると考えている。

[B]の授業科目や教育設備・機器においては、1～7 の授業科目に関する満足度が 2021 年度に比べて大きくポイントを下げている。新型コロナウイルス感染症によるオンライン授業の影響を強く受けているものと思われる。大学全体や工学部ではこうした傾向は見られておらず、基礎理工学科の特徴であるきめ細かな教育がオンライン化によりできなくなったことが、最大の要因と言えることを示していると考えている。同様の傾向は 13. 授業用実験室の設備・機器の充実度、14. TA による指導でも見られる。これも新型コロナウイルス感染症の拡大により、実験・実習がオンラインでの実施となり、実験室で設備・機器に触れる機会が減ったことや、TA からの親身な指導を受ける機会がほとんどなかったことが原因であると考えている。今後はコロナ禍以前と同じような教育体制に戻ることが予想されるので、それによりこれらの満足度は改善されると期待している。

[C]の総合評価については、例年大学全体、工学部と比べて満足度が低くなっている。これについては教員一同が学生からの評価を真摯に受け止め、満足度が高くなるような教育を目指して更なる努力をしていく必要がある。個々の対応だけではなく、学科全体として結束した対策も必要であると思われるので、十分な議論をしていきたいと考えている。

自由記述においては、A 号館の研究室エリアに関する不満が大きいことが見受けられる。研究室での自由な議論や研究活動が、見える化によって制約を受けているようである。これについては、移転初年度ということもあって、教員サイドの混乱も影響していると思われるので、時間をかけて改善していくことができる余地はあると考えている。

# 2022 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2023 年 5 月 15 日

工学部 環境科学科

2022 年度主任 榎本 博行

## 1. はじめに

2022 年度の卒業生は、入学初年度は通常授業だったものの、2020年度からコロナ禍の影響を大きく受け、遠隔授業への切り替えなどを強いられ、自分が思っていたような学生生活を送れなかったと想像される。それらをふまえ、環境科学科の2022年度卒業生満足度調査結果について学科会議などで検討した。ここでは、その結果の概要と今後の満足度向上のための対策について報告する。

## 2. 環境科学科の調査結果の概要

2022 年度の環境科学科、工学部全体、大学全体および、環境科学科 2021、2020、2019 年度のそれぞれの結果を表1にまとめた。総合評価は 2021 年度と比較して 0.1 ポイント上昇し、大学全体や工学部の平均レベルであった。

表 1. 獲得数値の合計のまとめ

	U (2022)	工学部 (2022)	全体 (2022)	U (2021)	U (2020)	U (2019)
[A] 知識・能力の獲得	3.6	3.5	3.5	3.5	3.6	3.7
[B] 授業科目群や教育設備・ 機器など	3.8	3.7	3.7	3.7	3.9	3.9
[C] 総合評価	7.6	7.3	7.4	7.3	7.5	7.9

### [A] 知識・能力の獲得

知識・能力の獲得については2019年度に大幅にポイントが改善していた(2019年度報告書参照)。その水準から大きく低下することはなかったが 0.1~0.2 ポイント程度の低下がみられた。2019 年度に大きく向上したのは、新カリキュラムに向けた授業内容の見直しの効果が出てきたものと考えており、その効果がやや低下しているものと考えられた。

低いポイントが継続している項目として、国際的な視野(8)が挙げられ、2.5~2.9 ポイントと、他の項目と比較すると相対的に低い。これは、昨年度と同様コロナ禍にあって国際的な活動も制限されたため、改善が難しかったものと考えられる。これは継続的に改善すべき点として注視していきたい。

2021 年度と比較して、物事を論理的に考える力(3)、他人と強調して物事に取り組む力(11)、新しい課題を発掘する創造力(12)が 0.2 ポイント以上上昇した。これは、コロナ禍であっても面接授業をより多く行うようになった影響であると考えられる。

### [B] 授業科目群や教育設備・機器など

授業科目群や教育設備・機器などについては、大幅に向上した 2019 年度の値から 0.1 ポイント低下して



いるが、2021 年度の値から 0.1 ポイント回復した。これまでと同様、授業科目群で高いポイントを示している項目は、卒業研究やゼミにおける指導(6)で、2021 年度よりもさらに 0.2 ポイント上昇した。基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)(5)や教職科目(7)も、2021 年度よりも 0.2 ポイント上昇した。

一方で、事務サービスのポイントが上昇あるいは維持しており、コロナ禍での事務方のきめ細かい対応があったからと思われる。図書館の図書・雑誌等の充実度(8)やパソコン等の IT 機器の充実度・利用しやすさ(10)は 0.2 ポイントの上昇となった。

逆に、留学制度(18)は、2021 年度よりも 0.2 ポイント低下した。これは、[A]でも述べたが、コロナ禍にあって国際的な活動が制限されたためであると考えられる。

合計は 3.8 ポイントで、前年度から 0.1 ポイント上昇した。工学部 3.7、大学全体 3.7 から考えると、環境科学科の学生の満足度はすこし高かったものと考えられる。

### [C] 総合評価

総合評価は 7.6 であり、2021 年度の 7.3 から上昇した。工学部 7.3、大学全体 7.4 であることから、環境科学科の学生の満足度は高かったものと考えられる。自由記述欄から、卒業研究・研究室での教育に関する満足度が高く、好意的なコメントが目立っていることから、各教員の丁寧な指導が高いポイントの要因となっていると考えている。

## 3. さらなる満足度維持・向上のための対策

### 3.1. 現カリキュラム・内容の定着とカリキュラム改訂への準備

2019 年度より新カリの前倒し実施・内容の定着を目指して学科内の改革を実施し、全体的に大幅にポイントが向上した。それにより学科の方向性として問題ないことが示唆された。その後の経過をみると、数値的には低下傾向を示し、現状では大学全体の平均レベルより少し上昇した。これをさらに向上させるため、「食品衛生」、「住環境設計」という新たな柱をさらに強化して、カリキュラム改訂への準備を進めていく予定である。食品衛生に関しては、2019 年 5 月に食品衛生管理者および食品衛生監視員の養成施設として認定された。また、住環境設計については、施工管理技士の指定学科として 2022 年 8 月に認定された<sup>[1]</sup>。これによって、在学時に指定科目を修得すれば、国家資格である 2 級施工管理技士(建築施工管理技士、電気施工管理技士、管工事施工管理技士、建設機械施工管理技士、電気通信工事施工管理技士)の第二次検定の受験資格が緩和されることになった。これらの学生の将来が見える・将来に役立つ・卒業時に資格が得られるカリキュラムにより、卒業時の満足度をさらに上昇させたい。

また、小中学校、高等学校にて、今後 SDGs が必修となる。SDGs には食環境・住環境に関する内容が盛り込まれており、本学科の新たな柱の定着には大きな追い風となる。新入生への教育はもちろん、在校生についても SDGs に関する知識の定着をはかり、今後の持続可能な社会に貢献しうる人材を育てることにより社会で必要な知識を大学にて学んだ実感を与え、満足度向上につながると考えている。

### 3.2. プロジェクト等の活性化

環境科学科では、「ベリーベリープロジェクト」、「カフェラボプロジェクト」、「電池プロジェクト」などのプロジェクト型教育を推進する一方で、「地域プロジェクト活動 1・2」等の総合科目(キャリア形成群)を通じて、大学祭等と同様なイベントに関わることができるように積極的に勧めている<sup>[2]</sup>。引き続き、このような活動を

活性化させるように努力することで、全体の満足度も向上させることができると考えている。

#### 参考資料

- [1] 国土交通省からの学長宛通知書(国不建第240号、令和4年8月1日)
- [2] 2023年度FD+SD研修会「大阪電気通信大学リメディアル教育実践報告」U 学科報告(2023年5月11日)

# 2022 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2023 年 6 月 8 日

工学部 建築学科

2022 年度主任 高畑 顯信

## 1. 知識・能力の獲得に関するアンケート結果に対する検討

「幅広い分野にわたる教養や専門的な知識・技能など建築の基盤に関わる知識・能力の獲得」は平均評価点数は質問7項目中4項目が4.0以上であり、7項目全体でも3.9～4.1となっている。また個人別評価点もほとんどが3以上の高評価である。一方で各項目ごとに1～4人程度の1～2の低評価者もいることから、不満足であった学生もいることがうかがえる。

「国際的な視野」の項目では平均評価が2.5～3.0と低く、2021年度卒業生の3.0～3.2からも低下している。個人別評価でも22～34人程度が1～2の低評価を与えている。今後の社会環境を考へても国際的な視点の教育が不足していたと評価されていることは、大いなる反省点である。

「コミュニケーション能力やグループワークに取り組む力」は平均評価はおおかた3.9～4.0の高評価となっている。教育の目的が達成できていることがうかがえる。しかし、「リーダーシップ」については3.4と低く、個人別評価では13人が1～2の低評価をしている。建築専門能力として必要なものなので、今後底上げをしていきたい。

## 2. 授業科目、教育設備・機器に関するアンケート結果に対する検討

「総合科目」は評価2が2～3人と少ない割に、平均が3.5程度とあまり高くなく、2021年度から向上していない。個人別評価も3が最も多いことが原因である。共通教育機構と連携して今後取り組むべきだと考へる。他方、「専門科目」は3.8～4.3と高評価である。特に「卒業研究やゼミにおける指導」は2021年度に引き続き平均値4.3と質問項目の中で最も高く、個人別評価でも74人の回答中評価5が40人と最も多く、次いで評価4が21人である。少人数・個人別のきめ細かい指導が高評価を得たと考へられる。ただし、低評価1が3名いることも見過ごしてはならない。原因を掘り起こし、改善に努めたい。

「図書館・IT機器講義室の環境などの施設や、シラバス・学務課などのサービス」は平均評価3.6～3.9と概ね高評価である。しかしここでも個人別評価では1～2の低評価者が3～7人いる。意見をくみ上げてフィードバックをしたい。

「サービス」の中でも就職課は平均評価3.8と高評価である。学科と就職課の連携の成果が出て、進路決定率が100%となったことを学生も評価しているものと考えられる。しかし2021年度は平均評価4.0が2022年度は3.8、個人別評価1, 2の低評価者が0人が、2022年度は4人と低下している。一部の学生には不評であったことがうかがえ、原因追求と改善が必要である。

大学祭等の行事が平均評価3.0と低評価であったのは、コロナ禍による活動制限が影響したものと考えられる。早く日常を取り戻せることを切望する。

## 3. 総合評価に対する検討

総合評価は10段階で7, 8が最も多く、評価5～10までに75人中72人が評価し、総合評価は7.5となった。概ね学

科の活動の方向性は評価されているものとする。一方で回答者75人中で低評価2～4とした学生が3人いる。これらの不満の原因を解決することが課題として残された。一方で卒業生75人全員が回答をしていることは、関心の高さがうかがえ、特筆すべきことである。

#### 4. 自由記述に対する検討

自由記述は設問にもよるが最大で75人の回答者中68人が記述をしている。教員実名表記や具体的な記述も多く、学校や教員・事務組織に対して概ね好意的で感謝の意を表している。これらの記述を参考に今後の学科運営に生かしていきたい。

#### 5. 満足度調査全体に対する検討

今回2022年度調査は、建築学科にとって2回目の卒業生の満足度調査である。卒業生75人全員の回答を得られていることは、本学科に対してしっかりと意識をもって学修し、社会に出ていったことがうかがえる。この結果をもととして、今後改善を重ね卒業生の満足度を向上させていきたいと考えている。

# 2022 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2023 年 6 月 8 日

情報通信工学部 情報工学科

2022 年度主任 江原 康生

## 1. 総合評価の結果について

2022 年度卒業生満足度の総合的評価（項目[C]）は 10 段階の主観評価において平均評価値が 7.1 となる結果であった。昨年度と同等の評価が得られた。コロナ禍が続く中、学業や様々な活動に制限がかかっている状況においても、教育および学生サービスの向上を本学および本学科が維持することができていることを示している。その傾向を踏まえて、現行の学科教育の課題と改善方針を卒業生満足度調査の結果に基づいて検討した。

## 2. 知識・能力などの獲得について

質問項目[A]群の「本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか」に関する回答は、昨年度と同様で平均 3.4 となっている。特に、「専門的な知識・技能」「物事を論理的に考える力」「知識やツールを組み合わせる力」については高い獲得度の評価が得られている。このように、卒業生の本学科での学びに関する評価の傾向は大きな変化は見られなかったが、比較的高い水準を維持できていると考える。

自由記述の回答でも、本学科の教育に関して肯定的な評価が多く認められる。2022 年度の特徴として、コロナ禍に伴う様々な制限が解除されつつある中、昨年度と比べて卒業研究における研究室活動で、様々なメンバー間の交流が活発に行われている記述が目立っている。また、コロナ禍の影響で停滞していた資格取得への取り組みが戻ってきている傾向がみられた。卒業研究では、指導教員が卒業研究生の研究進捗状況を定期的に報告させつつ、適切な助言を与えて議論・検討の機会を設けるほか、学科全体の卒業研究発表会の予稿や口頭発表の準備、卒業論文の執筆に関しても、発表練習・添削指導を何回も綿密に指導を行ってきている。このような指導体制が有効に機能している結果が肯定的な回答につながっていると考える。一方、多岐にわたる科目における教育においても肯定的な回答が目立っており、多様なニーズに本学科のカリキュラムが対応できていたことがいえる。

質問項目[A]群の中で、従前よりも低い評価にとどまっていたものは、「国際的な視野（専門分野）」「国際的な視野（異文化理解）」「国際的な視野（国際交流）」である。これはコロナ禍の影響がまだ続いていたことで、国際的な視野を育成する交流の機会が失われていた点が要因として考えられる。今後、コロナ禍の収束に伴い、活動の幅が広がっていくことで、可能な限り国際交流に関する機会を充実させていく必要があると考える。

## 3. 授業科目群や教育設備・機器などの評価について

質問項目[B]群の「本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて全体的に評価してください」に関する回答は、小計区分 B1～B7、B8～B14、B15～B19 について、それぞれの平均は {3.7、3.7、3.6} となり、2021 年度の {3.6、3.6、3.5} と比較して、全体的に評価が高くなってい

る。特に「基礎専門科目・専門科目(講義)」「基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」「卒業研究やゼミにおける指導」については高い評価を維持しており、学科における教育活動に対する肯定的な評価が得られていると考える。逆に「留学制度」「大学祭等の行事」に関しては評価が低くなっている。こちらもコロナ禍の影響を受けていた点が大きかったため、今後、コロナ禍の収束に伴い、改善に向かうことが期待される。

#### 4. 自由記述欄への回答について

「本学で良かった点」については、専門的な知識を学ぶことができたことや、研究室活動において、多くの友人や仲間ができたことを挙げた学生が非常に多く、学生同士の良好な社会的なつながりを構築することが大学の満足度に寄与することがわかる。また、研究室の指導教員との関係についても、肯定的な回答が多く、コロナ禍が続く中でも大学生活の中で多様な人間関係を育むことができていることを示している。

「改善すべき点」について最も多くの指摘を受けた項目は昨年度同様、新A号館の研究室環境であり、全体の3割を占めていた。新A号館の完成後、毎年の調査で非常に多くの指摘を受けており、新棟における研究環境の改善が、学生満足度の向上における重要な課題であることを示している。特に指摘が多かったのは、廊下からの騒音の問題、および他人の視線が気になる点が挙げられていた。情報工学科は他学科と異なり、通行量の多い廊下に、壁のない状態で直接面している研究室が多いため、騒音や視線の問題の指摘につながっているとされる。今後、学生の卒業研究活動の環境改善のため、大学と連携して、積極的に取り組む必要があると考える。

## 2022 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2023 年 5 月 10 日

情報通信工学部 通信工学科

2022 年度主任 村上 恭通

[A]本学で獲得した知識・能力

学科の強み(得意なところ)と弱み(苦手なところ)を知るため、過去 4 年の結果から 3.7 以上のもの、および、3.0 以下の項目を抽出した。

**2022 年度の強み:**「2 専門的な知識・技能(3.9)」、「5 知識やツールを組み合わせる課題に取り組む力(3.8)」、「7 困難に直面してもそれに対処していく力(3.7)」、「11 他人と協調して物事に取り組む力(3.7)」

**2021 年度の強み:**「2 専門的な知識・技能(4.0)」、「5 知識やツールを組み合わせる課題に取り組む力(3.9)」、「11 他人と協調して物事に取り組む力(3.9)」、「1 幅広い分野にわたる教養(3.8)」、「3 物事を論理的に考える力(3.8)」、「7 困難に直面してもそれに対処していく力(3.8)」、「4 的確な判断力(3.7)」、「6 考えていることを図解などで表現できる力(3.7)」、「9 コミュニケーション能力(3.7)」

**2020 年度の強み:**「2 専門的な知識・技能(4.0)」、「7 困難に直面してもそれに対処していく力(3.9)」、「11 他人と協調して物事に取り組む力(3.9)」、「1 幅広い分野にわたる教養(3.8)」、「3 物事を論理的に考える力(3.8)」、「5 知識やツールを組み合わせる課題に取り組む力(3.8)」、「6 考えていることを図解などで表現できる力(3.8)」

**2019 年度の強み:**「2 専門的な知識・技能(3.8)」、「11 他人と協調して物事に取り組む力(3.8)」、「5 知識やツールを組み合わせる課題に取り組む力(3.7)」

**2018 年度の強み:**「11 他人と協調して物事に取り組む力(3.8)」、「2 専門的な知識・技能(3.7)」、「3 物事を論理的に考える力(3.7)」、「7 困難に直面してもそれに対処していく力(3.7)」

**2022 年度の弱み:**「8c 国際的な視野(国際交流)(2.5)」、「8b. 国際的な視野(異文化理解)(2.3)」、「8a. 国際的な視野(専門分野)(2.2)」

**2021年度の弱み:**「8c 国際的な視野(国際交流)(2.5)」、「8b. 国際的な視野(異文化理解)(2.7)」、「8a. 国際的な視野(専門分野)(2.9)」

**2020 年度の弱み:**「8c 国際的な視野(国際交流)(2.6)」、「8b. 国際的な視野(異文化理解)(2.8)」、「8a. 国際的な視野(専門分野)(3.0)」

**2019年度の弱み:**「8c 国際的な視野(国際交流)(2.7)」、「8b. 国際的な視野(異文化理解)(2.9)」、「8a. 国際的な視野(専門分野)(3.1)」

**2018年度の弱み:**「8c 国際的な視野(国際交流)(2.5)」、「8b. 国際的な視野(異文化理解)(2.6)」、「8a. 国際的な視野(専門分野)(2.9)」

以上より、今回も過去と同様に「専門的な知識・技能」・「困難に直面してもそれに対処していく力」・「他人

と協調して物事に取り組む力」「知識やツールを組み合わせる課題に取り組む力」が特に育まれたことが確認される。また、残念ながら 3.7 以上の項目が 4 項目に減少し(2021 年度 9 項目, 2020 年度 7 項目, 2019 年度 3 項目), 全体の平均が 3.3 と前回より 0.4 ポイント減となっている。4年間のうちの 3 年間にコロナ禍で過ごすことになったため、学生間のコミュニケーションの機会が著しく減ったことも影響していると考えている。

また、「国際的な視野」の全項目については従来同様獲得することができておらず、前回より 0.3~0.4 ポイント下がっていることは残念である。語学が苦手な学生が多い傾向を表しているように感じた。

総括として、学科教育で力を入れている「技術力=専門知識・技能」「人間力=協調性」を育むことはできていると言えるが、国際的な視野を育むことは常に課題となっている。

## [B]本学の授業・設備・機器の評価

学科の強み(得意なところ)と弱み(苦手なところ)を知るため、過去 4 年の結果から 3.7 以上のもの、および、3.3 以下の項目を抽出した。

**2022 年度の強み:**「6 卒業研究やゼミにおける指導(4.1)」、「11 講義室等の環境(空調, 照明等)(4.0)」、「14 TA による指導(3.9)」、「17 寝屋川就職課/四條畷就職課 事務サービス(3.9)」、「5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)(3.8)」、「7 教職科目(3.8)」、「12 講義室等の映像・教材提示装置等の充実度(3.8)」、「13 授業用実験室の設備・機器の充実度(3.8)」、「10 パソコン等の IT 機器の充実度・利用しやすさ(3.8)」、「4 基礎専門科目・専門科目(講義)(3.8)」、「8 図書館の図書・雑誌等の充実度(3.7)」、「9 図書館の利用のしやすさ(3.7)」、「16 学務課/四條畷学務課 事務サービス(3.7)」、「18 留学制度(3.7)」

**2021 年度の強み:**「6 卒業研究やゼミにおける指導(4.2)」、「11 講義室等の環境(空調, 照明等)(4.1)」、「12 講義室等の映像・教材提示装置等の充実度(4.0)」、「13 授業用実験室の設備・機器の充実度(4.0)」、「5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)(3.9)」、「9 図書館の利用のしやすさ(3.9)」、「10 パソコン等の IT 機器の充実度・利用しやすさ(3.9)」、「4 基礎専門科目・専門科目(講義)(3.8)」、「8 図書館の図書・雑誌等の充実度(3.8)」、「14 TA による指導(3.8)」、「16 学務課/四條畷学務課 事務サービス(3.8)」、「17 寝屋川就職課/四條畷就職課 事務サービス(3.8)」

**2020 年度の強み:**「6 卒業研究やゼミにおける指導(4.3)」、「5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)(4.1)」、「11 講義室等の環境(空調, 照明等)(4.0)」、「13 授業用実験室の設備・機器の充実度(4.0)」、「4 基礎専門科目・専門科目(講義)(3.9)」、「10 パソコン等の IT 機器の充実度・利用しやすさ(3.8)」、「12 講義室等の映像・教材提示装置等の充実度(3.8)」、「14 TA による指導(3.8)」、「1 総合科目(外国語以外)(3.7)」、「9 図書館の利用のしやすさ(3.7)」、「17 寝屋川就職課/四條畷就職課 事務サービス(3.7)」

**2019 年度の強み:**「6 卒業研究やゼミにおける指導(4.1)」、「4 基礎専門科目・専門科目(講義)(3.7)」、「5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)(3.7)」、「11 講義室等の環境(空調, 照明等)(3.7)」、「13 授業用実験室の設備・機器の充実度(3.7)」

**2018 年度の強み:**「6 卒業研究やゼミにおける指導(4.1)」、「10 パソコン等の IT 機器の充実度・利用しやすさ(3.9)」、「5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)(3.8)」、「9 図書館の利用のしや



すさ(3.8)」、「11 講義室等の環境(空調, 照明等)(3.8)」

**2022年度の弱み:**「19 大学祭等の行事(3.1)」

**2021年度の弱み:**「7 教職科目(3.3)」

**2020年度の弱み:**「19 大学祭等の行事(3.0)」、「7 教職科目(3.1)」、「18 留学制度(3.2)」、「3 総合科目(英語科目以外の外国語科目)(3.3)」

**2019年度の弱み:**「19 大学祭等の行事(3.2)」、「18 留学制度(3.3)」、「3 総合科目(英語科目以外の外国語科目)(3.3)」、「15 シラバスや学生便覧等の諸資料(3.3)」、「16 学務課/四條畷学務課 事務サービス(3.3)」

**2018年度の弱み:**「3 総合科目(英語科目以外の外国語科目)(3.1)」、「19 大学祭等の行事(3.2)」、「18 留学制度(3.2)」

以上より、「卒業研究やゼミにおける指導」と「基礎専門科目・専門科目」(講義・実験・実習・演習すべて)について満足度が高かったことが窺える。これは実学教育に力を入れている成果が表れていると考えられる。このことは[A]の結果からも裏付けられている。また、本年度は3.7以上の高い評価の項目が14項目に増えていて過去最大となった。特に例年評価が低く、弱みであった「教職科目」が今回は0.4ポイント上がって強みになっていた。「大学祭の行事」の評価が低いのはコロナ禍のため、大学祭が開催されなかったので致し方ないとする。

[C]総合評価について:

コロナ禍の中でも総合評価が7.1を達成できたのは、コミュニケーションできるようにSlackを導入したことにより、近年の学生とのコミュニケーションに力を入れている点、教員間で学生情報を共有し、フィードバックしている取り組みなどが効果を上げていると感じている。ただし、2018年度6.8、2019年度6.9、2020年度7.2、2021年度7.3と順調に高くなっていったが、今回は0.2ポイント下がる結果となった。

自由記述欄について:

自由記述欄についても、すべて詳細に読み、内容を分析した。ここでは、逐一、コメントすることは避けるが、「よかった点」、「改善すべき点」、「要望」に記載されていることは、上述の結果を裏付けていることが、具体的な内容で記載されていて、大変参考になる。本年度も概ね高評価である印象を受けた。

「よかった点」では、具体的に講義名をあげて評価してくれているものも多く、非常に励みになる。また、「改善すべき点」や「要望」は丁寧かつ具体的に指摘をしてくれているので、非常にありがたい。

毎年「上下の交流の機会が少ない」という意見がある。この点の改善は、離学率の改善にも繋がるので、新入生合宿研修を導入することができた。残念ながらコロナ禍のため3年連続中止になり今後の課題となってしまったが、2023年度に導入することができた。離学率の改善につながることを期待したい。今回からオープンな環境の新棟に移転したので、今後は学内でも上下の交流は増えることを期待している。

## 2022 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2023 年 6 月 8 日

医療健康科学部 医療科学科

2023 年度主任 日坂 真樹

### 1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

教育目標は、カリキュラム・ポリシーの通り、高度化・多様化する医療技術に対応できる人間力と基礎的知識・技術力について教授研究し、医療・福祉機器の開発や医療現場において活躍できる総合医療エンジニアと高度技術に対応できる臨床工学技士を育成するために工学と医学の基礎を十分に学習させることにある。具体的には、医用工学系について ME 1 種および ME 2 種実力検定試験、医療機器情報コミュニケーター MDIC、臨床工学技士国家試験に合格させることにある。

### 2. 教育改善や授業点検、成績評価(平均値、成績分布、合格率など)について

- 1) 専門科目の授業改善プランを提示し、学習環境改善を図った。
- 2) 1,2 年次に対してコロナ禍のため、新たに Web 試験を導入し、2022 年度は 7 月、10 月、12 月および 2 月の計 4 回(追試験含む)の統一問題による実力試験を実施した。なお、2 年次に対しては、3 月に対面形式で実力試験を追加実施した。その中で、成績優秀者を表彰して学生のモチベーション向上を図った。基礎工学分野の成績優秀者はのべ 203 名、医用工学分野はのべ 289 名、基礎医学分野はのべ 409 名の 60%以上得点者を出した。これは、e-learning の学習時間も大きく関連しており、その後の学習過程にも大きく影響するものであると考えている。
- 3) 医科医療事務検定三級はコロナ禍の学習環境となったが、合格者は 1 年次 2 名、2 年次 6 名、3 年次 4 名の計 12 名であった。
- 4) 第 2 種 ME 技術実力検定試験はコロナ禍の学習環境となったが、1 年次 1 名、2 年次 3 名、3 年次 4 名、4 年次 4 名の計 12 名であった。
- 5) 医療機器情報コミュニケーター MDIC はコロナ禍の学習環境となったが、合格者は 3 年次 3 名の計 3 名であった。
- 6) 第 1 種 ME 技術実力検定試験はコロナ禍での学習環境の影響により、合格者はいなかった。
- 7) 臨床工学技士国家試験に 18 名が合格し、合格率 100%を達成した。

### 3. 学生指導(履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など)について

例年、教務委員および臨床実習担当教員、さらに、卒業研究指導教員またはグループ担任を中心とした履修指導につとめ、「履修の取りこぼし」防止をおこない、学生自身が国家試験受験資格に必要な科目の履修状況を確認できるような資料を用いて、学生自らが学修状態を把握し、それを管理できるように務めている。また、本学科独自で展開している学生証を用いた来学確認システムにより、本学の四條畷事務部との密な連携によって、連続 5 日間の欠席学生を抽出し、離学に至るプロセスを解析できるデータを収集している。しかし、今年度もコロナ禍の影響もあり、教員との面談の対応もあまり取れず、早期の学生相談等が実現できなかったが、その環境の中でも、遠隔授業等の小テストなどを用いた出席確認を用いて、学科で出席状況を把握し、離学者が少なくなるように努めている。現在、来学できていない学生の把握もで

きており、早期の情報収集に努める。また、就職指導においても、就職担当教員や卒業研究の指導教員が研究室配属学生の状況を把握し、学生自身がしっかりとした進路を見つけられるように、学生との密接な関係が構築できるように努めている。

#### 4. 卒業研究指導について

本学科では研究室配属の前に「キャリアデザイン」「プレゼミ」の科目を設け、卒業研究や技術系社会人として必要な基本的スキルを身につけさせている。これによって、視野を広く持たせ、学生自身の将来の選択肢を多く持つ工夫をおこなっている。なお、卒業研究配属に必要な研究室訪問も「キャリアデザイン」の授業内でおこない、訪問学生に対して教員または先輩たちが個別に対応するようにしている。卒業研究は4年生前期末の中間報告、後期中期末の概要提出と口頭試験、後期末の論文提出のすべてを満たす必要があり、その内容は生体医工学・福祉工学の各関連分野における調査・実験系の研究となっている。一部、コロナ禍の影響を受けたが、2022年度は学科会議で個々の学生の状況を確認し、学科全体で卒業研究の質の維持に努めた結果、本学科所属教員の研究室における卒業研究の不合格者は2名であった。なお、これからも学科内で情報を共有し、引き続き、学生のケアを怠らないよう務めていく。

#### 5. 卒業生満足度調査結果について

##### 1) 総合評価に関する分析

教務委員および実習担当教員、さらに、卒業研究指導教員またはグループ担任を中心とした履修指導をおこなった結果、個々の学生状況を把握しやすい環境を整えた。また、2年間のコロナ禍の影響があったものの、面接授業の再開や卒業研究の時間の増加に伴い、2022年度の教育の総合評価(10段階)は昨年度の得点の7.0より0.8上昇し、7.8となった。

##### 2) 専門分野と獲得した能力に関する分析

例年通り、臨床工学技士の国家資格取得に向けた授業を適切におこない、コロナ禍でも同じになるように、尽力したため、専門的な知識・技能の獲得度(5段階)は昨年度の3.9から0.1上昇し、4.0となった。国際的な視野(専門分野)に関しては医療従事者である臨床工学技士の国家資格取得の軸があるため、例年3.0程度であるが、2022年度は昨年平均2.9から0.2上昇し、平均3.1となった。なお、国際的な視野の養成は現状の教育方針に沿った環境構築を引き続き学科内で検討していく予定である。

##### 3) 授業科目および卒業研究に関する分析

卒業研究指導教員またはグループ担任からの学生状況を学科会議等で共通認識することにより、個々の担当者だけでなく、学科教員全体でサポートできる体制を構築している。コロナ禍からの面接授業増加などにより、専門教育の実習および講義の満足度評価(5段階)は昨年度の3.9と3.7から、それぞれ4.0と4.0に上昇し、講義および実習の面接授業の再開による評価の向上があった。卒業研究やゼミにおける指導の満足度評価(5段階)も昨年度の3.8から0.4向上した4.2となった。卒業研究を通じて得る問題解決能力は非常に重要であるため、引き続き、学科内で卒業研究に対する取り組みをさらに充実させていく予定である。また、総合科目群の満足度評価(5段階)も向上しており、対面授業再開の効果があったと推察される。

#### 4) 自由記述に関する分析

自由記述における内容の印象に残っている科目では学科先生の科目が多く記載されており、充実した教育であったことが窺えた。また、わかりやすく丁寧に説明してくれた、ゼミでの活動が自分の成長につながった、教員が心身に実験を進めてくれたなど、個々の専任教員の授業に対する良いコメントや高い評価が多くあった。また、卒業研究での指導教員と関わりがとてよかった、ゼミの友人達と切磋琢磨できた、設備が充実していた、最後までいねいに教えていただけたなど、卒業研究を通して、各教員が研究室の学生と信頼関係を構築していることも推察できた。また、専門分野の教授達に直接指導をしていただけた、幅広い学問を学ぶことができたなどの記述もあり、本学科の目標と一致する記述も多くあった。

#### 5) 教育設備に関する分析

四條畷キャンパス全体の問題と考えられるが、いわゆる食堂や通学のバスなどの意見が多く、学生の不満を解消させるハードウェアやシステムの整備が必要であると考えられる。

### 6. その他, 特記事項(学科独自の教育, アクティブラーニング, 離学者対策など)など

技術者としての必修であるドキュメンテーション能力の基礎を教授するために、2年次で「アカデミック・ライティング」を開講しており、図表の記述、参考文献の提示などの基本的な知識を低学年時から徹底させる試みをおこない、2年次の「電気電子工学実験」により、学生自身で経験した実験の報告書の作成をおこない、さらに、3年次の「キャリアデザイン」の開講により、幅広い分野の知識を得て、4年次の「卒業研究」の中で、プレゼンテーションや卒業論文の作成を可能にするスキルが身につくように、学年の進行に伴い、学生自身でスキルアップができるようにしている。また、3年次の「生体機能代行医用機器学実習」や4年次の「生体機能代行装置学実習」では、学生自身が興味のある部分を中心に事前に調査(グループワーク)し、その結果をプレゼンすることにより、積極性を獲得させるとともに、その結果から学生の知識レベルを外部講師が確認し、実習に役立っている。このような教える側と教わる側の双方にメリットのあるアクティブラーニングを取り入れている。これより、学生自ら興味のある部分に積極的に関わることにより、授業への意欲が飛躍的に向上すると思われる。また、3年次の「ヒト型ロボット創造製作実習」では、板材から部品を金属加工により製作し、学生たちが自ら発案した二足歩行ロボットを製作するなど、実習・演習科目群は学生の自主性を重んじるように心がけている。さらに、学生中心の心電図読図の勉強会を開催し、高学年の学生が低学年の学生に教える指導もおこなっている。これについては、病院において即戦力として機能する能力であると期待される。同時に、先輩・後輩の人間関係を学び、人間形成にも役立っている。また、企業・病院に就職した卒業生が実習補助員として授業に参加し、学生(後輩)に授業内容はもちろん、社会人としての心構えや実体験などを伝え、学生から大変好評を得ている。

### 7. 添付資料

特になし。

# 2022 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2023 年 5 月 10 日

医療健康科学部理学療法学科

2022 年度主任 小柳磨毅

## 1. 知識や能力の獲得

平均は、3.6 点であり、比較的高い評価が多かったが、国際的な視野に関する評価が、3 点未満で最も評価が低かった。今後、講義や卒業研究において国際的な情報収集を行い、海外から講師を招聘するなど、国際交流にも努めていきたい。

学科全体で取り組んでいる点コミュニケーション能力は、昨年に比べ、0.3ポイントの減点であった。今後さらにカリキュラムを充実させる必要がある。リーダーシップや協調性も 0.3ポイントの減点であり、今後さらにグループワークを主体としたカリキュラムを充実させる必要がある。

## 2. 授業科目、教育設備・機器

専門科目、卒業研究などの満足度はいずれも 4 点を上回り、概ね、講義や実習、ゼミ活動が適切に実施されていたと思われる。一方、総合科目が昨年比でポイントが減少した。図書館と設備、事務サービス、大学祭等の行事に対する評価も概ね 3 点代の評価で昨年比でポイントが減少しており、学生の満足度が低下したことがうかがえる。

## 3. 自由記載

専門基礎および専門科目が、国家試験と臨床実習に役立ったとする記述が多く見られた。知識と技術の教育水準をさらに高めていきたい。

一方、学生の不満としては、バス便をはじめとする通学の不便に関する記述が見られた。キャンパス全体の問題として、駐車場を含む、通学の利便性向上に努める必要がある。

以上

## 2022 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2023 年 6 月 2 日

医療健康科学部健康スポーツ科学科

2022 年度主任 中井 聖

[A]の「本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？」に対しては、昨年度と同様の高い評価を得ることができた。特に、「1 幅広い分野にわたる教養」の項目得点が高かったが、学科全体で学修の取り組みの改善を図ったことが奏功したと思われる。前年度に引き続き、「9 コミュニケーション能力」や「11 他人と協調して物事に取り組む力」といった項目の得点が最も高かったが、健康、運動・スポーツといった学科の学びの中心的項目で必要とされる能力が十分涵養されたことが見て取れる。一方、「8 国際的な視野」に関わる項目の点数が他の項目に対して低く、専門分野の国際標準を知ったり、他国の健康・体力づくりの実情を知ったりするなどの関連した取り組みの導入が望まれる。

[B]の「本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。」についても、昨年度と同程度の評価を得ることができた。「6 卒業研究やゼミにおける指導」の評価は昨年に増して高評価を得ており、本学科でのこれらの取り組みが学生にとって満足のいくものであったことが窺い知れ、引き続き注力して取り組んでいきたい。「19 大学祭等の行事」の評価は非常に低く、四條畷キャンパスの学生らも学内行事を望んでいるにもかかわらず、期待に沿って実行されていないことが分かる。

[C]の「あなたが本学で経験した教育について、全体として考えて、総合評価を 1～10 の 10 段階で評価してください。」についても、昨年度と同様、高評価を得ることができた。ひとえに学科教員の協働、協力の賜物だと思う。

自由記述については、例年と比べてネガティブな意見が減ったように思われる。[D]の「あなたが本学で良かったと思う点を書いてください。」には、特に学科教員の丁寧な取り組みや学生との良好な関係性を示すような項目が多く見られ、学科全体としての取り組みの改善が奏功したことがうかがえる。一方、[E]の「あなたが本学で改善すべきと思う点を書いてください。」においては、キャンパスの立地や交通利便といった改善が難しい項目についての指摘が見られた。[G]の「あなたの現在の感想も含めて、大阪電気通信大学への要望や提案などを自由に記してください。」には、部活動やサークル活動の活性化を求める意見が複数見られた。コロナ禍も収束しつつある中で、新入生の勧誘も含めて積極的な活動を促していきたい。

以上

## 2022 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2023 年 5 月 25 日

総合情報学部 デジタルゲーム学科

2022 年度主任 門林 理恵子

2022 年度卒業生満足度調査における、教育の全体を考慮した総合評価(質問項目[C])は 10 段階評価で平均 7.6 と前年度より 0.2 ポイント上昇した。質問項目[A] 群(知識・能力の獲得に関する質問)、質問項目[B]群(授業科目群や教育設備・機器などに関する質問)の評価はともに前年度と同じであったが、コロナ禍にあっても学びの質を維持できた考えられる。

質問項目[A]群の「本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか」に関する回答は、3.6 ポイントと前年度と同じであるが小項目では違いがみられる。「専門的な知識・技能」「物事を論理的に考える力」はそれぞれ 4.0 ポイント、「知識やツールを組み合わせる力」「他人と協調して物事に取り組む力」はそれぞれ 4.1 ポイントと高い評価を維持している。「的確な判断力」は 0.2 ポイント上昇して 3.8 ポイント、「新しい課題を発掘する創造力」は 0.1 ポイント上昇して 3.8 ポイントとなった。コロナ禍で授業の実施形態に大きな制約があったが、オンライン授業への対応が進んだことや面接方式でのグループワークの実施ができるようになったことなどが評価が上がった要因ではないかと思われる。一方、「国際的な視野」に関しては、小項目の「国際的な視野(専門分野)」は前年度と同じであったが、「国際的な視野(異文化理解)」は 2.6、「国際的な視野(国際交流)」は 2.5 とそれぞれ 0.1 ポイント下がる結果となった。従来より異文化理解や国際交流の機会を設けているが、コロナ禍により実施できなかったことも影響していると考えられる。オンラインでの効果的な実施方法などを検討したい。

質問項目[B]群の「本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて全体的に評価してください」に関する回答は、3.7 ポイントと前年度と同じであった。授業科目群については 0.1 ポイント上昇して 3.8 ポイントとなった。なかでも「卒業研究やゼミにおける指導」は 4.3 と前年度の 4.2 より 0.1 ポイント高くなった。また、事務的なサービス等に関する質問群では「就職課事務サービス」の項目が前年度より 0.2 ポイント上昇し 4.0 となった。コロナ禍による制限も次第に緩和されて面接方式での指導が可能となり、より丁寧な指導がしやすくなったためではないかと思われる。一方で、設備等に関する項目群のうち「図書館の利用のしやすさ」が前年度より 0.3 ポイント下がって 3.6 となった。コロナ禍で図書館の利用の仕方に慣れる機会が少なかったことが要因ではないかと思われる。

今回高評価を得た項目はそれが維持できるように、また、評価が低い「国際的な視野」に関してはコロナ禍などの外的要因の影響を受けにくくする方法を検討し、今後も学びの質・環境を高い水準で維持できるよう努めたい。

## 2022年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2023年6月2日

総合情報学部ゲーム&メディア学科

2022年度主任 横山 宏

本学科が2021年度の完成年次を過ぎ2年目としての結果である。教育についての総合評価(質問項目[C])は、10段階評価で7.3であり、昨年度よりも0.3ポイントも下回ってしまった。また、大学全体の平均よりも0.1ポイント、四條畷キャンパス6学科の平均よりも0.2ポイント下回っている。今後への改善課題があるものと真摯に受け止める。

- 1)質問項目[A]「本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか?」の回答(5段階)では、12項目の平均が3.6であった。所属する総合情報学部と同じであるが、昨年度よりも改善されたものは、物事を論理的に考える力3.9、知識やツールを組み合わせる力4.2、取り組む力4.2、考えていることを図解などで表現できる力3.8、新しい課題を発掘する創造力3.9であった。昨年よりも0.2ポイント以上低いものは、国際的な視野に関するものが多く、専門分野2.9、国際交流2.5、であった。これらのことから、国際交流におけるコミュニケーション能力の育成について、教育改善の課題があるものと受け止める。また、専門的な知識・技能が3.9と昨年より0.2ポイント下ってしまったことは特に改善しなければならない。
- 2)質問項目[B]「本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。」の回答(5段階)では、19項目の平均が昨年度より0.1ポイント上がり3.8であった。平均より高いものは、卒業研究やゼミにおける指導4.3、基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)4.1があり、他に教室や設備に関するものがあつた(図書館の利用のしやすさ4.0、パソコン等のIT機器の充実度・利用しやすさ3.9、講義室等の映像・教材提示装置等の充実度4.0、授業用実験室の設備・機器の充実度3.9)。これらのことから、教育環境の充実を前提としつつも、3年生後期からのゼミ指導において、本学科の教育目標の完遂に教員一同の一層の努力に努めたい。
- 3)自由記述[D]「あなたが本学で良かったと思う点を書いてください。」での72件の回答を分類すると、カリキュラム・教育方針・教育システムに関するものが40件(55.6%)、教員に関するものが13件(18.1%)、施設・設備に関するものが7件(9.7%)、友人に関するものが12件(16.7%)であった。カリキュラム・教育方針・教育システムに関するものと教員に関するもので53件(73.6%)となり、本学科のカリキュラムとそれらを実現させるべく邁進した教員の努力が、学生の学びに役立ったものと受け止めた。
- 4)自由記述[E]「あなたが本学で改善すべきと思う点を書いてください。」での63件の回答を分類すると、カリキュラム・教育方針に関するものが29件(46.0%)、情報連絡に関するものが12件(19.0%)、通学バスや立地に関するものが17件(27.0%)、施設・設備に関するものが5件(7.9%)などであった。



5)自由記述[G]「あなたの現在の感想も含めて、大阪電気通信大学への要望や提案などを自由に記してください。」での49件の回答を分類すると、教育環境に関するものが8件(16.3%)、カリキュラム・教育方針に関するものが12件(24.5%)、立地・設備に関するもの17件(34.7%)、学生生活に関するもの12件(24.5%)などであった。大学全体はもとより学科としても教育システムのさらなる改善に努めていかなければならないと真摯に受け止める。

以上

## 2022 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2023 年 6 月 8 日  
総合情報学部 情報学科  
2022 年度主任 鴻巣 敏之

**[A]**本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？

全体として昨年度より評価の平均値は向上している。コロナ禍の影響を結構受けた学年ではあるが、次第にコロナ禍での対応が進み、すべての授業が遠隔となることがなくなり、対面での授業が可能な授業は対面で、遠隔会議システムなどの新たなコミュニケーション手段を利用して遠隔でも対面と同等の効果が得られる授業は遠隔で行うなど、適切な授業運営ができたことが向上につながったと考えられる。

一方、「8 国際的な視野」の3項目については他の評価項目に比べて平均点が低く、全体の平均値を下げている一要因になっている。学科内で、国際的視野を意識した取り組みが必要と思われる。また、「10 リーダーシップ」の評価も高くない。この項目は、学生にとって得意不得意があると思うが、得意な学生の長所を伸ばし、評価の向上につなげる工夫を検討して必要がある。

**[B]**本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。

昨年度とほぼ同様の評価の平均値となっている。項目 4 と 5 の基礎専門科目・専門科目に関する部分の評価も高く、昨年度から新型コロナウイルス感染予防対策が行き届き、それが継続されているのが評価されていると思われる。

卒業研究やゼミにおける指導については、平均値 4.1 に向上した。当学科では3年次に卒業研究を行っているので、卒業研究の実施は 2021 年度となり、学科での中間発表会や最終発表会は遠隔であったが、指導においては対面での学生とのやり取りも多く再開され、この点が向上につながったのではないかと思う。加えて、卒業研究においても授業同様に遠隔会議システムなどの新たなコミュニケーション手段を利用したりなどの指導もされており、場面によって有効な指導ができたのではないかと考えている。

TA による指導が高評価となっており、自由記述にも意見がある通り演習授業におけるTAのきめ細かい対応が良かったものと思われる。

また、「17 四條畷就職課 事務サービス」については、昨年度より 0.3 ポイント向上した。学生の就職活動に関する指導を四條畷就職課が非常に丁寧に行った結果と考えられる。

**[C]**あなたが本学で経験した教育について、全体として考えて、総合評価を 1～10 の 10 段階で評価してください。

総合評価については、[A]や[B]の評価平均値を 10 点換算した点数とそれほど差はないので妥当と思われる。昨年度より下がったが、0.1 ポイントであり、大きな問題があったとは考えていない。

**[自由記述]**

3 年次の卒業研究実施については、ポジティブな記述がいくつか見られた。就職活動に3年次卒業研究が

有効であると判断している。

プログラミングや専門分野の教育内容についての評価も肯定的であり、その他さまざまな授業に肯定的な印象の記述があった。コロナ禍での影響を大きく受けた学年ではあるが、学生・教員ともにコロナ禍対応に慣れ、良い評価にもつながったと思われる。

キャンパスの立地や、交通手段、食堂についてはコロナ禍による影響で遠隔講義が多かった学年の卒業生にも関わらず改善を求める意見が多く見られ、今後対面授業が多く実施されるとさらに否定的な意見が増えるのではないかと思われ、対策が必要と考える。

# 2022 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2023 年 5 月 29 日

共通教育機構 人間科学教育研究センター

2022 年度主任 金田 啓稔

## 1. 総合科目の満足度(評価)について

2022 年度の卒業生満足度調査結果より、人間科学教育研究センターが主に担当している「総合科目(外国語以外)」の満足度は、寝屋川キャンパス 3.6(前年度比±0)、四條畷キャンパス 3.7(前年度比+0.1)であった。また、「総合科目(英語科目以外の外国語科目)」の満足度も、寝屋川キャンパスで平均 3.3(前年度比±0)、四條畷キャンパスで平均 3.5(前年度比+0.1)であった。寝屋川キャンパスでは 2021 年度と比べて満足度に変化は見られないが、四條畷キャンパスにおいては全体的に満足度が上昇した。2020 年度から比較すると両キャンパスにおいてわずかではあるが全体的に満足度が上昇している。この卒業生満足度調査とは別に授業期間内に実施している授業アンケートにおいても総合科目の評価は高まってきていることから、引き続き、人間科学教育研究センターとして授業改善に務めていきたい。

## 2. 総合科目に関連する自由記述について

次に、卒業生満足度調査の自由記述から、総合科目に関連する記述を抜粋した上で改善策を検討する。総合科目全般については大学全体の評価と同時に「教員の質が高く、全体的に話しかけやすい雰囲気だったところが良かった。総合科目なども良い授業が多かった」「総合科目と一般科目が充実していたので、電気や工学以外も積極的に学ぶ事ができた」と高評価があった一方で、「講義によっては人数が多すぎて質問がしづらかった点。総合科目の教授との連絡がとりづらい点」について指摘があった。問題点の指摘についてはオフィスアワーや Moodle 機能などを活用した学生との連絡など具体的な改善策を実施の上、受講生への丁寧なアナウンスを心掛けたい。また、カリキュラムに関する記述としては、「大学なので総合科目が必修なのはわかるが、1 年生の間から授業でもっと専門分野について学んでいきたい」との意見があった。次のカリキュラム改訂では学科との連携により、総合科目と専門科目の有機的な連携がさらに図れるよう検討を進めていきたい。

それぞれの科目に関する記述としては、下記に示したように印象に残った科目として記述し、ポジティブな意見や感想が多かった。

### (1)総合科目(講義・演習系科目)について

学生自身が大学で学修を進めていく中で広く視野を持ち、多角的考察ができるよう、幅広い教養科目として提供している総合科目についてポジティブな意見が多くみられた。また、学生自身の卒業制作への貢献やこれからの社会で大切なことを学べる機会となったという次へ繋がる学修機会となった学生の意見があった。今後も学生自身の大学生活、さらに社会生活の中の一助となるように貢献したい。

- ・『日本語上達法 2』…著作権を学べるので受けた方が良い。
- ・『日本語上達法 1』…文を構成する要素を理解できた。丁寧に教えてくれた。  
…論文の書きかたがまなべた。

- ・『現代社会を考える』…毎回授業の内容がわかり、社会的なことから、保健のことまで多分野のことを学ぶことができる点。
- ・『日本国憲法』…日本の憲法の成り立ちなどを学んだ。
- ・『社会生活と法』…法律は大切。
- ・『日本の近代史』…第一次世界大戦までの日本の歴史を学んだ。
- ・『情報リテラシー』…インターネットについて学ぶことができた。
  - …現代社会で必要な事をしれた気がする。
  - …パソコンの使い方を理解した。
- ・『情報社会と情報倫理』…教え方がとても良く先生じたいも優しい。
- ・『現代社会と青年の心理』…心理的な事に関する話は聞いていておもしろい。気軽に受けることができる科目。
- ・『発達心理学』…理解しておくべきことを学べた。
  - …発達心理学(平沼博将):今までの知識にプラスしてより理解・知識が深まった。
  - …卒業制作を考える上で役立った。
- ・『教育制度論』…勉強することで人生がどう変わっていくかを知れた。
- ・『経済学の世界』…教員の方の教え方がききやすかった。
- ・『異文化の理解』…為になることが多かったです。
  - …異文化、海外への理解が深まった。
- ・『ジェンダー論』…これからの社会で大切な事を学べると思う。

## (2)総合科目(英語以外の外国語科目)について

初修外国語となる英語以外の外国語に対して「役に立った。印象に残っている科目。」を挙げている卒業生がみられた。また、「英語以外の外国語の授業を増やしてほしい」といった意見がみられた。一方で英語教育も含まれるが「外国語科目のテスト難易度を少し上げた方がいい」といった意見や「中国語科目等で、日本語の汲みとりが難しい方がおられるので、その点が改善されたら良いと思います」といった意見が寄せられた。後者に関してはネイティブ講師であるため、学生との活発な会話など授業の中で導入するなど対応したい。

- ・『中国語1、2』…わかりやすい。
- ・『中国語 1』…毎回生徒に発言の機会があって積極性があった
  - …楽しく学べた
- ・『韓国語 1・2』…説明が分かりやすかった。
  - …韓国が好きなので学べてよかった
  - …習うのは、初めてでしたがローマ字感覚で勉強することができたから。
- ・『ドイツ語』…なじみの無い科目でもしっかり分かりやすく教えていただけた

## (3)総合科目(スポーツ実習)について

スポーツに関しては、寝屋川キャンパス・四條畷キャンパスの両キャンパスで「運動の楽しさ」を味わえたコ

メントが多くみられた。同時にスポーツ実習1のねらいとしている『学生生活を円滑にするための仲間づくり(スポーツコミュニケーション)』の効果に関するコメントが多くみられた。その一方で寝屋川キャンパスでは施設に関連する要望が多く寄せられた。アクティビティホールの完成に伴う改善、さらに2023年度スポーツ実習1では四條畷キャンパスで導入している運動量の志向性によるクラス分けの導入など改善策を試みる。

#### 『スポーツ』

:体を動かせるから

:いい運動になった。

:身体を動かせた。

:たぶん大学では珍しい、体を動かすタイプの授業。他の授業などで疲れた心身をリフレッシュしたり、少しでも運動したい人にオススメ

:体を動かすことの少ない中で、取り組めたこと。

:運動不足の解消ができるから

:楽しく、自主性がきたえられる。

:大学でも体を動かすことが出来、仲良くおこなうことが出来た。

:運動できて楽しかった。

:1から4年までさまざまなスポーツができた。

:初めて意識的に単位取ることを諦めた。

:レポートをしっかり書けばいける

:スポーツの授業のする内容を増やしてほしい。

:体育の授業で他学科の生徒と交流できて仲良くなったこと

:運動不足を解消しつつ思いきり体を動かせるため。

#### 『スポーツ実習1』

:1年で履修すると友達が増える。

:1年生におすすめ。友達ができます。

:1年生の時にとっている色々な学生と話す機会があり学生生活がより良く過ごせると思う。

:コミュニケーション能力の上達。今も仲の良い友達はこの科目でできた。

:コミュニケーション能力が身に付いた。

:運動をする場所を作っていた

:今に至るまでにここで友達を沢山作る事ができた。

#### 『スポーツ実習3』

:ダーツなど普段やらないものを体験できたこと

#### 『健康スポーツ』

:心の病気について学べた

#### 『スポーツ文化論』

:おもしろかった。

#### 「施設に関する要望」

- ・ジムの設備
- ・トレーニングルームを充実してほしい
- ・寝屋川グラウンド芝にほしい
- ・バスケットコートが四條畷でしかないで寝屋川にも体育館がほしい。
- ・運動施設が少なかった。
- ・体育は必要ないと思う。グラウンドは一部の人しか使っていないように見えたので取り壊して別の施設を建てた方が良く思う。
- ・寝屋川キャンパスにもテニスコートが欲しかった

### 3. 人間科学教育研究センターの取り組み

人間科学教育研究センターでは、学生が幅広い教養と社会人としての基礎的な能力を身につけられるように数多くの総合科目(教養科目)を開講するとともに、日本語活用能力の向上を目指す「日本語上達法」や、現代社会の問題に各教員の研究分野からアプローチする「現代社会を考える」などの授業にも力を注いできた。更に2020年度からスタートした新カリキュラムでは、これまでの取り組みや内容を発展させるとともに、総合科目を更に魅力あるものにするために「総合教養」「アジアの言語と文化」「ヨーロッパの言語と文化」「平和学」などの多くの新設科目を開講している。また、授業以外の学修支援として、Moodle(学修支援システム)を活用した個別のレポートライティング指導「レポートマスターへの道」も行っており、今後もこうした取り組みを通して、学生の満足度を高める努力を続けていきたい。

以上

## 2022 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2023 年 6 月 8 日

共通教育機構 英語教育研究センター

2022 年度主任 杉村 寛子

### 2022 年度の総括

当センターに関わる「総合科目（英語科目）」に関して、寝屋川および四條畷両キャンパスとも、5 段階評価でほぼ半年並みの 3.5 ポイントであった。2019 年度入学生による卒業生満足度調査の結果であるため、2015 年度から開始した旧カリキュラムに対して一定の評価を得たものと理解している。また自由記述（印象に残る科目およびその内容）においては、寝屋川では 15 件、四條畷では 3 件、英語に関する言及があった。内容としては「おもしろかった」「楽しかった」という漠然とした感想が多く見られる一方で、「外国語（特に英語）の授業に力を入れてほしい」「卒業研究で英語の文献を読むのに必要である」など、英語の必要性を強く感じ、今後本学の英語教育の展開に期待を寄せるコメントも 2、3 あった。昨今、機械翻訳の精度は格段に高まり、さらにそれを凌ぐ勢いを見せる生成 AI の台頭によって、英語教育にもこれらの積極的な活用を呼びかけるなど、さまざま立場からの見解が飛び交うが、少なくとも本学の学生には文法知識に基づき構文を正しく分析できる力と磐石な読解力を身につけさせ、一定のレベルまでは自らの力で英語と向き合えるように育て、巣立たせたい。またアカデミックな目的から需要の高い、外国人教師による「EIGOP」や、課外における英語学習のサポートや TOEIC をはじめとする資格検定試験対策などの助言を行なう、日本人教師による「イングリッシュ・カフェ」を展開しており、これらのプログラムも一層充実させ、機能させていきたい。

### 2024 年度に向けての展望

この調査結果は 2015 年度に開始された旧カリキュラムに対するフィードバックにすぎず、2020 年度開始カリキュラムについて審判が下ったわけではない。したがって、この調査結果に基づき、現行のカリキュラムをクリティカルに検討し直すことはできないが、2020 年度からは 1 年次生用に「読む」「聞く」を中心に、「話す」「書く」も適度に取り入れたカリキュラムを構築しており、入学時より均衡の取れた英語学習を保証している。さらに 2 年次および 3 年次において、積み上げ式の学習プロセスをイメージし、学生がそれぞれ伸ばしたいと思う技能に特化した科目を選択し、学習を続けることができるようになっている。特に就職活動にも有効に働くと考えられる英語資格試験 TOEIC を念頭に置いた資格対策コースの設置は、英語学習への動機づけとなり、意欲ある学生を鼓舞するものとする。2024 年度に開始するカリキュラムでは、2020 年度の改革における大枠を大きく変えることなく、本学に入学してくる学生の実態に即した形で教科書の選定や教育方法に改善を加えながら、教員一丸となって取り組んでいきたい。

最後に、英語教育に期待されていることが専ら 4 技能を高めることと思われがちであるが、調査項目にある「国際的な視野（異文化理解）」（この項目の評価は寝屋川 2.6、四條畷 2.8）の涵養も今後英語教育において積極的に関与していくべき領域であろう。英語という外国語を学ぶこと自体が異文化理解につながる。日本語とはまったく体系の異なる言語を学び、それを背景に社会・歴史・文化を見つめ、違いを知ることで、日本の外にある世界まで視野が広がり、興味関心が高まっていく。今後は使用する教科書や教材の内容が国際的な視野の広がりの一助となるように工夫していく必要があると考える。



## 2022 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2023 年 6 月 8 日

数理科学教育研究センター

2022 年度主任 萬代 武史

### 1. 設問[A]について

AS センターが主に関係する項目は 1~6 であると思われる。基礎専門科目として、数学と物理学の講義・演習と実験では重点を置いて教育している項目である。大学全体では「1 幅広い分野にわたる教養」(2021 年度 3.8)「3 物事を論理的に考える力」(2021 年度 3.9)「4 的確な判断力」(2021 年度 3.7)「6 考えていることを図解などで表現できる力」(2021 年度 3.7)は 2022 年度も同じポイントであり、「2 専門的な知識・技能」(2021 年度 3.9)「5 知識やツールを組み合わせる課題に取り組む力」(2021 年度 3.9)は 2022 年度は 4.0 に +0.1 の向上が見られた。これらの数値は AS センターが特に力を入れている数学・物理科目の基礎学力向上の取り組みの成果が表れているものと考えられる。

表 1 に学部ごとの伸びをまとめた。医療健康学部・総合情報学部はそれぞれ L, T 学科のみ担当しているため、当該学科も載せた。ほとんどの項目で同じか上昇しており、高水準を維持している。これまでの我々の取り組みが実を結びつつあることを伺わせる。

表 1 学部ごとのポイントの伸び【2022 年度(2021 年度)Δ変化】

	工学部	情報通信工学部	医療福祉工学部	L	総合情報学部	T
1	3.8(3.8)Δ0	3.7(3.7)Δ0	4.0(3.9)Δ+0.1	4.0(3.8)Δ +0.2	3.9(3.9)Δ0	3.9(3.8)Δ +0.1
2	3.9(3.9)Δ0	3.9(3.9)Δ0	4.1(4.0)Δ+0.1	4.1(3.9)Δ +0.2	4.0(4.0)Δ0	4.0(3.9)Δ +0.1
3	3.9(3.8)Δ +0.1	3.7(3.8)Δ-0.1	3.9(3.9)Δ0	4.0(3.9)Δ +0.1	4.0(3.9)Δ +0.1	4.0(3.9)Δ +0.1
4	3.7(3.7)Δ0	3.5(3.5)Δ0	3.8(3.8)Δ0	3.9(3.6)Δ +0.3	3.8(3.7)Δ +0.1	3.9(3.7)Δ +0.2
5	3.9(3.9)Δ0	3.8(3.9)Δ-0.1	3.9(3.9)Δ0	3.9(3.8)Δ +0.1	4.1(4.1)Δ0	4.0(3.9)Δ +0.1
6	3.8(3.8)Δ0	3.6(3.6)Δ0	3.7(3.7)Δ0	3.8(3.6)Δ +0.2	3.8(3.6)Δ +0.2	3.8(3.6)Δ +0.2

### 2. 設問[B]について

AS センターが関係する項目は 4 と 5 であり、大学全体では「4 基礎専門科目・専門科目 (講義)」3.9、「5 基礎専門科目・専門科目 (実験・実習・演習など)」4.0 と昨年度から 0.1 ずつ上昇している。

[B]の平均が 3.7 であることから、相対的に良い評価を得ていると言える。表 2 に学部ごとの伸びをまとめた。全体的にかなり向上している。下がったのは T 学科の 5 のみであり、これも 4.1 から 4.0 と高水準である。

表 2 学部ごとのポイントの伸び【2022 年度(2021 年度)Δ変化】

	工学部	情報通信工学部	医療福祉工学部	L	総合情報学部	T
4	3.8(3.8)Δ0	3.8(3.7)Δ+0.1	3.9(3.8)Δ+0.1	4.0(3.7)Δ +0.3	4.0(3.9)Δ +0.1	4.0(4.0)Δ0
5	4.0(3.9)Δ +0.1	3.9(3.9) Δ0	4.0(3.9)Δ+0.1	4.0(3.9)Δ +0.1	4.0(4.0)Δ0	4.0(4.1)Δ- 0.1

### 3. 自由記述について

AS センターに直接的に関係する内容は限られているが、授業に関する具体的な意見が出されており、授業改善への指針として貴重なものであるといえる。今後のカリキュラムマネジメントと各科目の講義へフィードバックをかけるために慎重な分析を進めたい。

#### (1) 数学系科目に関する意見として、

計算が楽しかった。自分の興味があった数学や物理の知識の見解を広げることができてよかった。  
勉強が分からないときに数学相談室を設けているところが良かった。  
分からない所を丁寧に教えてくれた。先生の解説がわかりやすかった。

といった専門の学びへつながる学習ができていることを評価する意見が見られた。一方で、生徒に興味がある先生と、興味がない先生の差が大きかった。又、数学のレベル分けが、うまく出来ていなかった。入学時の数学のクラス分けが難しいクラスになって大変だった。といった声も一部あり、クラス分けについては課題が残っている。

#### (2) 物理科目に関する意見として、

自分の興味があった数学や物理の知識の見解を広げることができてよかった。  
物理学を初めて学習したがとても分かりやすかった。

等の意見や、物理学実験について、

1 年生でさまざまな現象に触れることができた。

15 回にわたって様々な分野の基礎実験や解析を学べたことが印象的。

など、評価する意見が見られた。また例年通り、TA や SA に質問や相談できたことを高く評価する意見が多くみられた。AS の科目とは限らないが、演習付き講義科目で、TA や SA を付けていることが受講生に評価されているものと思われる。

### 4. まとめ

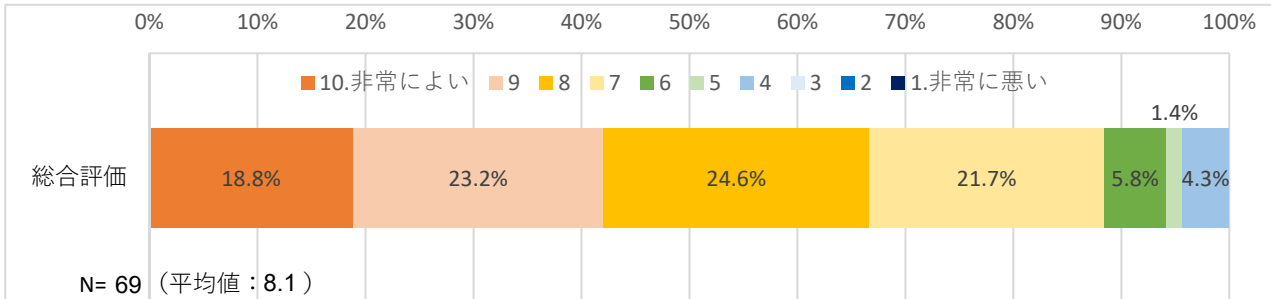
AS センターの専任教員・特任教員・非常勤教員は分担・協力して、1～2年次生の授業を数多く担当しており、今までに培ってきた授業の工夫やノウハウは蓄積され、これを共有してきている。共通教育機構では、さらに授業のねらいや目的を明確にし、学生へのオリエンテーションの充実を図りながら、習熟度別クラスの編成、専門科目との連携を強化して、全学的な基礎教育の充実を目指している。また、時折発生する学生からの注文や意見に対しても迅速に対処できる体制を整えている。ASセンターでは、入学時のプレイスメントテストを実施して、習熟度別クラスによる授業運営を推し進めてきた。複数学科を合わせてクラス分けすることは、単に習熟度別授業を実現するためだけではない効果もある。「他学科との交流が欲しい」といった声が幾つもあり、学科単独のクラスと、複数学科によるクラスとでは授業中の雰囲気も異なるようである。2024年度からの新カリでは、複数学科の合同は難しくなるが、習熟度別クラス編成は出来る限り続ける予定である。今後も、共通教育機構としての役割を果たせるよう、習熟度別クラス間の調整、基礎専門科目と専門科目の連携を深めていきたい。



## 2022年度 修了生満足度調査

大学院全体：集計結果

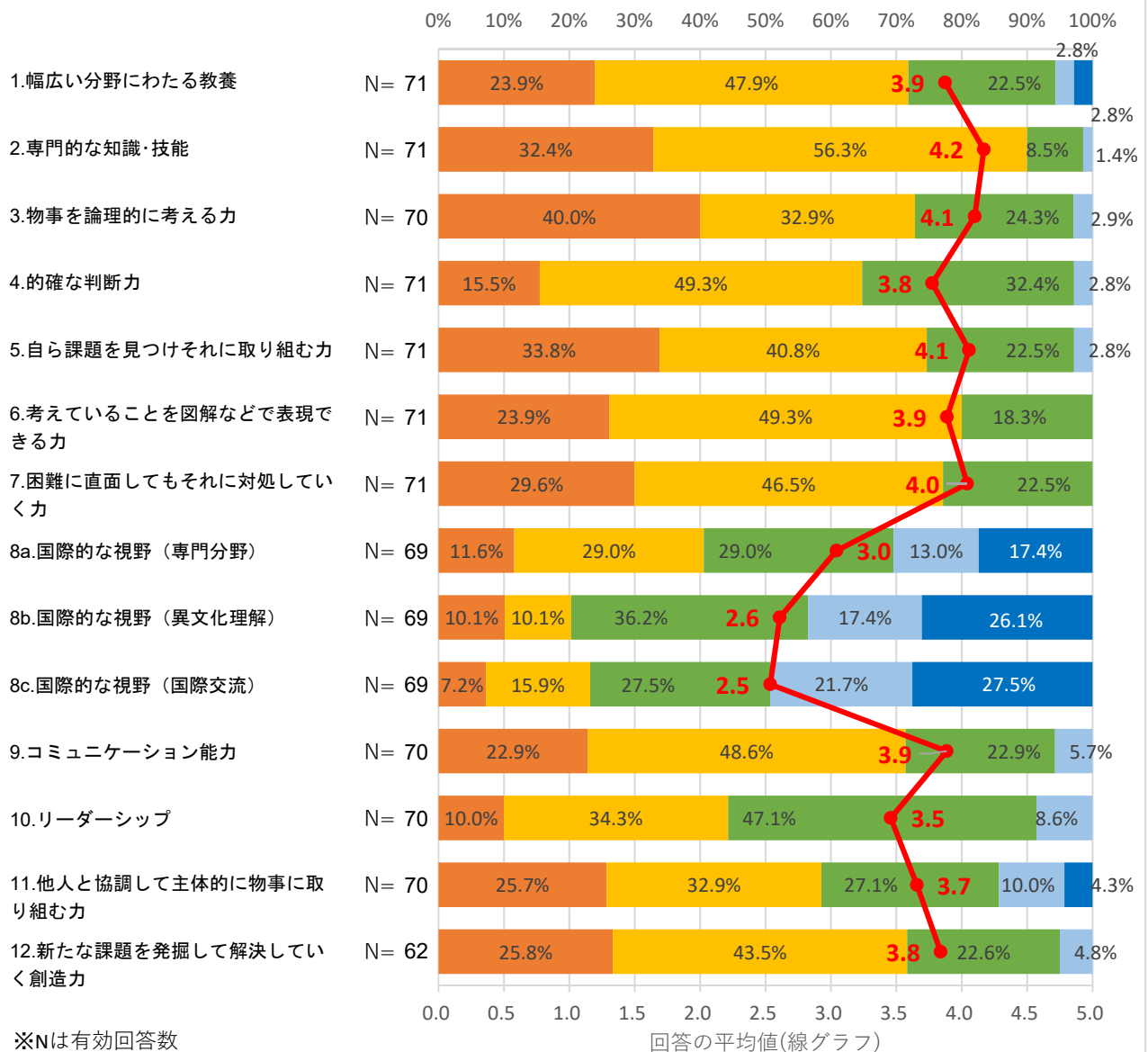
◆あなたが本学の大学院で経験した教育について全体として考えて、総合評価を1～10の10段階で評価してください。



◆本学での大学院生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？

■ 5.十分獲得した ■ 4.ある程度獲得した ■ 3.どちらとも言えない ■ 2.あまり獲得していない ■ 1.獲得していない

選択肢別の割合(棒グラフ)



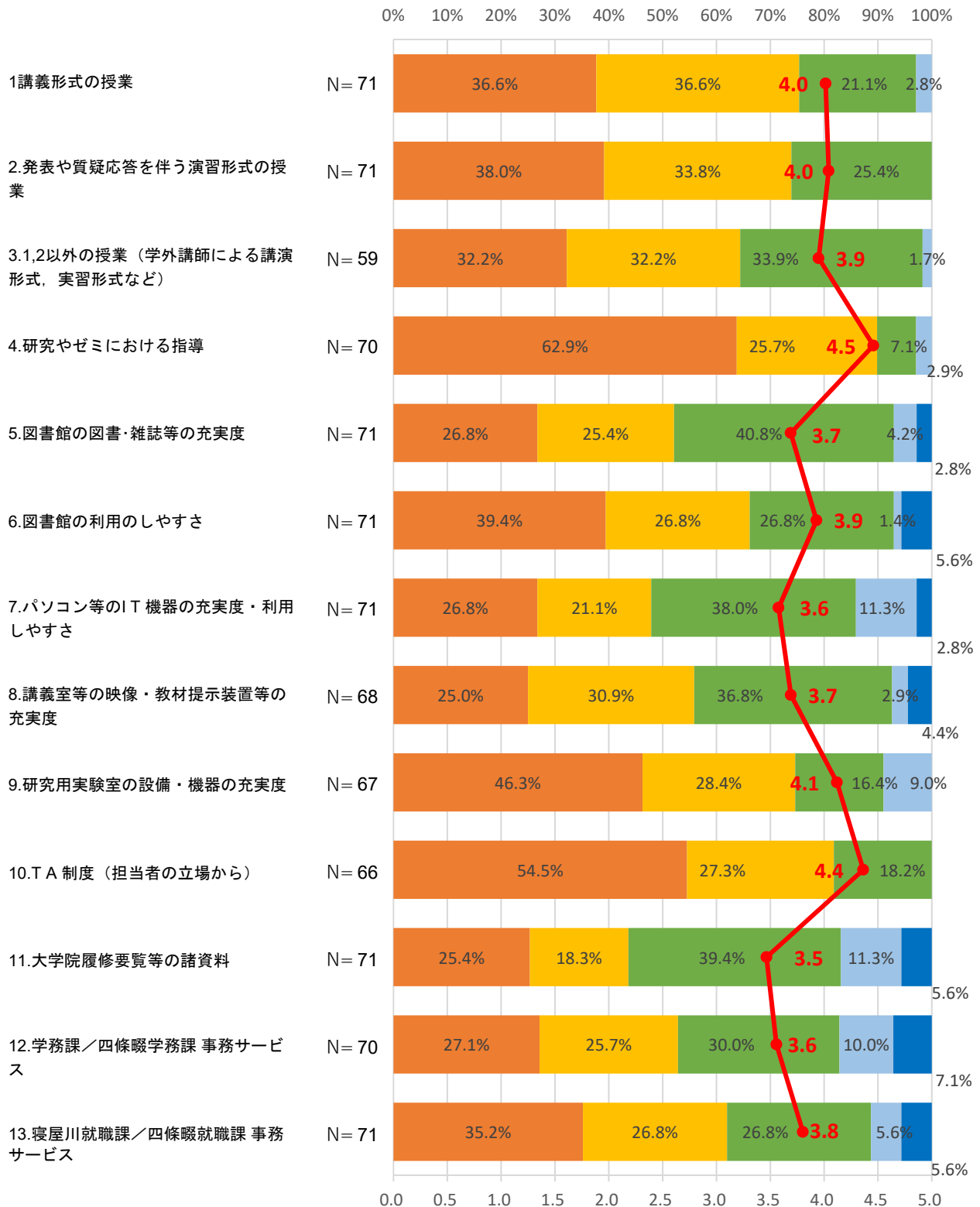
## 2022年度 修了生満足度調査

大学院全体：集計結果

◆本学での大学院教育を振り返り、以下の授業科目群や設備・機器などについて、全体的に評価してください。

■ 5.よかった ■ 4.ややよかった ■ 3.ふつう ■ 2.やや悪かった ■ 1.悪かった

選択肢別の割合(棒グラフ)



※Nは有効回答数

回答の平均値(線グラフ)

大学院

2022 年度

「修了生満足度調査結果の検討」

## 2022 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2023 年 6 月 5 日

大学院工学学科先端理工学コース

2022 年度主任 齊藤 安貴子

2022年度は6名の学生が博士前期課程、1名の学生が博士後期課程を修了した。その満足度調査の結果、総合評価では10点満点中8.2点であり、前年度の7.8に比べて向上した。これは、大学院全体の8.1、寝屋川キャンパス7.9と比較してもやや高くなっている。コロナ禍の中で大学院の研究を継続してきた院生であるが、昨年度低下した反省を踏まえてコース全体で努力した結果がでたと考えている。

[A]のさまざまな知識や能力をどの程度獲得できたかという問いに対しては、全体平均で5点満点中3.7であり、2021年度より0.3ポイント低下している。寝屋川キャンパス全体でも3.5(2021年度3.8)と0.3ポイント低下しており、各設問においても全体的に低下している。個々の設問を見ていくと、「専門的な知識・技術」「自ら課題を見つけそれに取り組む力」が、それぞれ4.4、4.2と他の項目よりも高い評価を得ている。これは、寝屋川キャンパス全体の4.0、3.9と比較しても高い傾向があった。大学院での研究において、さまざまな場面で指導教員の指導のもとで専門的な知識や技術を獲得して、自ら課題を見つけて研究を行った結果がこの評価に表れていると思われる。その反面、「国際的な視野」については全体的に低い傾向にあり、コロナ禍で国際学会に参加する機会が減ったことが原因だと考えられる。今後は対面での研究活動が活発になると思われるので、評価の改善に取り組んでいきたい。

[B]の授業科目群や設備・機器などについては、全体平均が4.1となっており、2021年度からの高水準を維持していた。特に、「研究やゼミにおける指導」が4.8と、好評価であった昨年度の4.6から0.2ポイントのさらなる向上が見られた。本コースの先生方の努力によりこのような高い評価を得ることができ、今後も質の高い指導を継続していきたいと考えている。この項目で評価が低いのは、今年度も「大学院履修要覧等の諸資料」、「学務課事務サービス」であった。例年これらの設問に対する評価が低いが、これはコースの努力では対処できない問題であり、事務部門でも満足度調査の結果を精査し、問題の解決に向けた具体的な対策の検討をお願いしたい。寝屋川キャンパス全体でも低評価であることからコースに限ったことではないと考えられる。

自由記述で特に気がついた点としては、自分が所属する研究室以外の院生との交流が少なかったという声が多かったことが挙げられる。2021年度も同様な意見があり、院生の研究成果の議論の場であるゼミナールがオンラインでの実施になったことが理由だと考えていたが、対面開催した2022年度でもあまり改善していないことから、研究室間での意見交換の場を作るなど工夫が必要だと考えられる。新型コロナが5類に変更されたことから、2023年度はコロナ以前に戻ると考えられるが、院生間の交流を活性化させる取り組みについては、継続して議論をしていきたいと考えている。



## 2022 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2023 年 6 月 8 日

大学院工学研究科電子通信工学コース

2022 年度主任 前川 泰之

大学院工学研究科電子通信工学コースでは 2022 年度は 11 名が卒業し、そのうち 11 名全員からアンケート結果が提出されている。アンケート結果を見ると、[A]、[B]の各項目の満足度の合計は、前年の 2021 年度と比べ平均点で[A]では 0.3 ポイント増加し、[B]でも 0.1 ポイント増加している。特に増加が著しいのは、[A]の項目では、1の幅広い分野における教養(前年度 3.4 から 4.2 へ 0.8 ポイント増加)、2の専門的な知識・技能(0.6 ポイント増加)、7の困難に直面してもそれに対処していく力(0.7 ポイント増加)である。これに対し、5自ら課題を見つけて取り組む力は昨年に比べ 0.3 ポイント減少となっている。また[B]の項目では、1の講義形式の授業(0.9 ポイント増加)、2 発表や質疑応答を伴う演習形式の授業(0.8 ポイント増加)、13 就職課の事務サービス(0.7 ポイント増加)の評価が増大しており、7パソコン等の IT 機器の充実度・利用しやすさ(0.6 ポイント減少)と 12 学務課の事務サービス(1.0 ポイント減少)が低い評価となっている。

以上のように、全体の総合評価は 7.6 と昨年度平均と同じ値であるが、[A]、[B]の各項目においては、総じて昨年度よりポイントが増加傾向にある。このことはまだコロナ禍の影響が強く、大学院ゼミナール等でも遠隔が主流であった昨年度に比べて、徐々に面談の授業がむしろ主流となり、研究室の活動も常時面談で可能となったことを反映した結果、高いポイントの評価につながったと言える。ただ[A]の項目の中で、8b 国際的な視野(異文化理解)と 8c 同(国際交流)がいずれも 2.2 ポイントと昨年度と同様に極めて低い値となったのは、依然として国際学会の開催が国内にのみに限られたことや、海外の研究者等の来日や来校がまだ厳しく制限されていたことと関連が深いと考えられる。幸い次年度からは国内のみならず海外への渡航や入国が大幅に緩和される見込みであり、大学院教育における国際化の充実がさらに期待される。

また、[B]の授業科目群や設備・機器などの評価において、本年度はほぼ対面の授業や研究室指導が行える様になったため全般に評価は高いが、7パソコン等の IT 機器の充実度・利用しやすさのポイントが極端に下がったことの原因がやや問題である。もしかすると院生自身が常時自身のノートパソコン等を自宅でも盛んに使いこなすようになり、研究室や演習室のパソコンがやや古くなり使い勝手が悪くなっているという感想を持っている可能性も無きにしもあらずと言える。さらに 11 大学院履修要綱等の諸資料が 1.0 ポイントも昨年度から下落して 2.3 という極めて低いポイントになっている。これは、最近 Web 等の図表が主体のマニュアルになれてきた院生が、従来の印刷物による説明書に馴染みにくくなって来ていることが考えられる。現に次年度卒業要件単位の履修が不完全で再度履修申請をやり直さざるを得ない様な事例も出て来ているので、現在の学生が見慣れているような Web 等にある様な図表を交えたより分かりやすい説明が求められると言える。これは 12 学務課の事務サービスにも共通すると言える。

以上

添付資料なし

....

## 2022 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2023 年 5 月 31 日

大学院工学研究科制御機械工学コース

2022 年度主任 山本 剛宏

総合評価は 8.2 点と高い評価になっている。研究やゼミにおける指導への高評価や自由回答の内容から、学生が充実した研究活動が行えたことが、高い評価につながっていると考えられる。以下に、各質問項目に対する検討内容を報告する。

まず、「獲得した知識と能力」については、全体の平均点が昨年度から低下し、工学研究科の平均点を下回る結果となり、改善の必要があると思われる。しかし、自由記述の回答では、研究活動に対する満足や、学会参加や共同研究を通じた他大学の学生や教員との交流によって専門的な知見を広げられたことを良かった点として挙げる意見が複数見られる。したがって、学生が、研究活動については概ね満足しているが、より高度な知識と能力の獲得が可能であったと考えているのではないかと推察する。引き続き、十分な研究活動を行える環境を提供していくことが、学生の研究活動を通じた自身の能力向上への満足につながっていくものとする。また、「国際的な視野」については、他の項目に比べて低評価であり、昨年度からのポイントの低下も大きい。長年、評価の低い項目であるが、これは、本学では、学生が海外の学生や研究者と交流する機会が少ないことが原因であると考えられ、その改善のためには、大学全体で、学生の国際的活動に対する意欲を刺激する仕組みが必要と思われる。

次に、「授業科目群・設備・機器」に関する検討結果を述べる。

授業およびゼミにおける指導については、比較的高い評価が得られている。研究室での指導や授業における各教員の努力が評価されたと考える。引き続き、質の高い教育・研究指導の維持に努めていきたい。また、例年と同様に、国際工学技術特論のような企業の技術者を講師に招いた授業に対する評価は高く、企業の技術者の講義を受ける機会の提供は重要であると考えられる。

設備関連では、「パソコン等の IT 機器の充実度・利用しやすさ」や「研究用実験室の設備・機器の充実度」について、昨年度からのポイントの低下がやや大きい。自由記述から、3D 造形先端加工センターなどの工作関連設備や職員のサポートに関する評価は高いが、IT 機器に対する評価はやや低いと判断できる。個々の研究室で対応が難しいものもあるため、大学共通設備として、大学院生が研究に利用できる 3D CAD やコンピュータシミュレーションに利用可能な計算機環境、IT 関連設備の充実が必要と思われる。また、研究活動に対する満足度について高い評価を受けているものの、実験スペースの不足や OECU イノベーションスクエアにおけるオープンな学生エリアでの研究活動の難しさを指摘する意見も複数あり、今後、大学院の活性化や研究競争力の向上のためには、研究分野に応じた実験スペースの確保や必要に応じてクローズな環境を創出できる研究エリアの準備といった大学院生の研究環境を提供していく必要があると思われる。

## 2022 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2023 年 6 月 8 日

大学院工学研究科情報工学コース

2022 年度主任古崎晃司

今年度の当コースの総合評価(7.3 点)は、過去 5 年間(2017 年度:7.4, 2018 年度:10.0, 2019 年度:9.0, 2020 年度:7.8, 2021 年度:9.0)と比較すると、年ごとに得点が上昇・下降を交互にくりかえしており、今年度は過去 5 年のなかで最低点であった。今年度の修了生数は 9 名であったが、2017 年度は 9 名、2018・19 年度は 4 名以下、2020 年度は 6 名、2021 年度は 7 名であり、標本数が少ないことから評価点自体を単純に比較するのは難しい。しかし、2021 年度修了生が大学院在学期間のすべてをコロナ禍の不自由な状況で過ごした中において高評価であったことに対し、今年度の修了生はコロナ禍の体制から通常体制への移行に伴う「度重なる状況の変化」が評価に影響を与えたものと思われる。

授業に関しては、コロナ禍の 2 年間を通じて遠隔で実施されていた大半の科目が、本年度は面接形式の講義で行われるようになった。ただし、コロナ禍に実施した遠隔講義のノウハウやメリットも考慮して、発表形式の「ゼミナール」については、大学院生以外の学部生の聴講参加をオンラインで可能とするなど、一部にオンライン講義も取り入れることで教育環境の一層の充実を図った。このような前年度からの環境の変化の影響もあったと思われるが、講義に関する評価は昨年度よりも、0.5-0.6 点の減少は見られるものの、1 名を除いて 3-5 点としていることから、十分な教育環境を提供することができたと考えられる。

主に研究に関連する、教養、知識・技能、論理的思考力、判断力、創造力等の指標についても、講義と同様に昨年度に比べて 0.5-0.6 点の減少は見られるものの、1-2 名を除いて 3-5 点としている。特にゼミにおける研究指導とそれに伴う能力の取得に関する評価が、他の項目に対して高くなっており、大学院教育の中心となる研究指導が適切に行えた結果であると思われる。なかでも「自ら課題を見つけそれに取り組む力」と「考えていることを図解などで表現できる力」の評価が高く、学会発表を行い、修士論文を仕上げたことに加え、インターンシップが中心となる就職活動においても自主的に行動し内定を勝ち取ったという体験が大きな自信につながったものと思われる。

国際的な視野に関する評価が非常に低いのは例年と同じであるが、今年度の修了生もコロナ禍により海外に出張する機会に恵まれなかったことが評価の低さに影響していると思われる。国際会議に参加する大きな意義は海外の研究者と対面で交流することであり、学生の評価から失望が強く窺える。今後は以前のように学生も海外の国際会議に出張できる見込みであり、学生の国際的な視点を身に着けることができる機会につなげていきたい。一方、リーダーシップや協調性に関する評価についても、昨年度と同様に低くなっているのが気になる。学部生があまり来ない研究室もあり、アンケートの自由記述にも「学部生との交流の機会が少ない」という意見もある。今後、このような力を養う機会を多くする工夫を考えたい。

最後に、昨年度に引き続き、自由記述として新棟の研究室に関する意見が複数あったことを指摘しておく。新棟はオープンスペースのコンセプトの下に設計されているが、修了生からは周囲からの音漏れ、個人スペースやプライバシーに対する不満や要求が出されている。研究室の大きな魅力の一つが独自の空間で自分の研究に集中できる点にあり、それが大学院進学への動機の一つの大きな要因になっていることが、この点からも分かる。学生が満足して研究に没頭できる環境の在り方を全学的に今後も追求する必要があると考える。

## 2022 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2023 年 6 月 8 日

大学院総合情報学研究科デジタルアート・アニメーション学コース

2022 年度主任 原久子

2021 年度より総合評価が 1.5 ポイント向上し、概ね満足度は得られたのではないかと考えられる。本学ならではの充実した機材環境の中で VR などの最新の技術を導入した学びを経験できたことへの評価はあったが、デジタルアート・アニメーション学コースの研究室の教員室・ゼミ室(学部と合同)ともに他のコースと比較してもかなり狭く、研究環境として機材に埋もれて作業をすることになっており、院生室などを設けて院生の研究・制作環境の充実をはかることは必要だろう。

また、盛んなゼミ活動や学外活動(下記参照)が盛んに行われていることへの評価がある一方で、他大学大学院との交流がないことについて複数の指摘があった。コロナ禍ということも関係するが、大学院生の研究・制作へのモチベーションを高めるためにも、学会への参加をまず促し、院生自身の発表へのステップの機会とすることも重要と考えられる。

2022 年度の学外活動例(学部との合同開催):

インター・カレッジ・アニメーション・フェスティバル (ICAF) 2022 <https://icaf.info/>

BitSummit 2022 <https://bitsummit.org/edition/2022/>

遊戯湯 (2023/1/28-29) <https://www.osakac.ac.jp/project now/gm/1124>

## 2022 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2023 年 6 月 8 日

大学院総合情報学研究科デジタルゲーム学コース

2022 年度主任 高見 友幸

今回の調査結果では、知識や能力の獲得に関する質問[A]は 3.8(2021 年度:4.2, 2020 年度:3.9), 大学院教育や設備・機器に関する質問[B]は 4.0(2021 年度:4.2, 2020 年度:4.0), 教育の全体を考慮した総合評価[C]は 8.1(2021 年度:8.8, 2020 年度:8.2)といずれも前年度より低い評価となった。しかしながら、前々年度(2020 年度)との比較で言えばほぼ同等の評価であり、また、2022 年度大学院全体の平均値とも同等またはわずかながら高評価である。したがって、この 2022 年度の評価低下は 2021 年度の一時的な高評価に負うものであろうが、いずれにせよ、評価低下の理由は探られるべきであろう。

個別に見れば、[A]の「専門的な知識・技能」が 4.4 と前年度よりも評価上昇、[B]の「研究やゼミにおける指導」も 4.6 と非常に高い。一方、[A]の「国際的な視野(専門分野)」が 2.8、「国際的な視野(国際交流)」が 2.9 と前年度との比較では異常に低く、これが評価低下の一因である。また、[B]では、「図書館の利用しやすさ」が 3.7 と前年度同様に低い評価である他、「就職課 事務サービス」が 3.6(前年度 4.2)と低い評価であった。「図書館の利用しやすさ」については、デジタルゲーム学コースという分野的な関係上、研究テーマに関連する蔵書数を取り揃えるのが困難であるという理由があり、解決はむずかしいかも知れない。

評価 3 以下の回答がなかった項目(全員が 5 か 4 の高評価とした項目)は、[A]の「専門的な知識・技能」のみである(平均評価は 4.4)。回答人数が 9 人と多いことから考えて有意な高評価であろう。また、上述のとおり、[B]の「研究やゼミにおける指導」も 9 人中 7 人が評価 5 としている(平均評価:4.6)。これらの項目の高評価が維持される限り、大学院の授業および研究室運営に携わる側としては満足である。

## 2022 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2023 年 6 月 8 日

大学院総合情報学研究科コンピュータサイエンスコース

2022 年度主任 升谷 保博

本コース(2020 年度まではコンピュータサイエンス専攻)の総合評価の平均値は、2020→2021→2022 年度で 8.2→7.3→7.3 と変化しており、2021 年度に大きく評価を下げたままである。分布を比較すると、総合評価が 7 以下の比率が 2020 年度は 11%(1/9)だったのに対し、2021 年度と 2022 年度は 50%(4/8)に増えており、低下は明らかである。2021 年度に回答した学生は、コロナ禍の始まった 2020 年度に大学院へ入学しており、2020 年以降に対面の授業やイベントが減ったり、研究指導の形態が変化したりしたことが影響していると思われる。しかし、大学院全体としては、8.0→8.1→8.1 と推移しており、本コースの固有の問題としてとらえる必要がある。

設問[A]「本学での大学院生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか?」については、全項目の平均値は、2020→2021→2022 年度で 3.7→3.8→3.5 と推移しており、2022 年度に低下した。他の項目に比べると、「8 国際的な視野」の評価が低く(3.0, 2.4, 2.4)、これは例年の傾向であり、本コースの今後の重要な課題である。また、「1 幅広い分野にわたる教養」の平均値も低い(3.0)。これは、2021 年度までにはなかった傾向である。なお、この設問の自由記述の回答は「折れない心」という一つだけであった。

設問[B]「本学での大学院教育を振り返り、以下の授業科目群や設備・機器などについて全体的に評価してください。」については、全項目の平均値は、2020→2021→2022 年度で 4.0→3.8→3.5 と低下している。2021 年度からの低下の大きい項目は、「2 発表や質疑応答を伴う演習形式の授業」(3.9→3.1)、「4 研究やゼミにおける指導」(4.3→3.5)である。これらは、コロナ禍による授業形態や研究室運営の変化の影響と推測される。また、評価の平均値の低いのは「1 講義形式の授業」(3.1)、「2 発表や質疑応答を伴う演習形式の授業」(3.1)、「8 講義室等の映像・教材提示装置等の充実度」(3.1)である。なお、この設問については自由記述の回答は「プロジェクターの調子が悪すぎる。」の一つだけであった。

設問[A][B]において、2022 年度は、獲得度や評価を 1 にした学生がおり(例年はいない)、回答総数が少ないために、平均値はその影響をかなり受けている。

自由記述には、肯定的な内容が多かったが、改善を求めるような内容で具体的なものとして以下があった。

- 論理的思考力を見つけるための授業が必要
- コロナ禍における TA 業務の不満
- 学生が奇譚なく発言できる環境作り
- 院生と学部生が触れ合う機会
- 設備の改善(複数)(プロジェクター、教室のコンセント)
- 駅から遠い

大学に長く在籍した修了生の声にはしっかりと耳を傾ける必要がある。

以上

## 2022 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2023 年 6 月 10 日

大学院 医療福祉工学研究科

2022 年度主任 田中 則子

設問[A]本学での大学院生活を通して獲得した知識や能力においては、すべての項目で 3.0 以上、平均 3.9 であり、総合平均で昨年度を 0.2 上回る結果であった。各項目を見ると、12 項目中 10 項目において昨年度と比較してポイント向上または維持していた。これはまだコロナ禍で活動制限がある中でも各教員がそれぞれに工夫して学生教育に注力してきた成果である。一方、「1 幅広い分野にわたる教養」、「10. リーダーシップ」については前年度に比してポイントが低下していた。今後、さらに学生へ幅広い分野の情報に触れる機会や研究室活動や専攻全体での活動においてブラッシュアップしていく機会を工夫してしていきたい。

設問[B]本学での大学院教育(授業科目群、設備・機器など)においては、平均 4.0 で昨年度とほぼ同程度ながら 0.1 ポイント向上していた。その中でも、「6 図書館の利用しやすさ」は前年度に比して 1.4 ポイントと著しく向上していた。「5 図書館の図書・雑誌等の充実度」や「大学院履修要覧などの諸資料」これまで全体の中でも低い 3 点台のポイントとなっていたため 2022 年度の改善課題として挙げていた部分であったので、この領域の改善が見られたことは非常によかった。教育、研究活動に直結する図書館や大学院要覧等の WEB 提示資料の環境整備の工夫をいただけたことが満足度向上につながったと考えられた。その一方で、「講義形式の授業」「研究やゼミにおける指導」、「パソコン等の IT 機器」「映像・教材提示装置等の充実度」の満足度が低下していた。さらなる充実にむけて、専攻内の各担当教員および事務部門と協力して改善につとめていきたい。

設問 [C]本学での大学院教育に対する総合評価は 9.7 ポイントで、昨年度に比して 1.4 ポイントの大きな向上がみられた。中でも 10 段階で 10 の回答をしていた学生が 6 名中 5 名であり、高い満足度を感じていた学生が多かったことは非常によかった。自由記載欄には、教員指導に対するプラスの意見も多くみられた。一方で他分野との交流やバイク置き場の環境整備の向上を求める声については、今後検討していく必要がある。

■参考

当報告書と合わせ下記の資料が参考となることを、添えておきます。

『教育基本3方針（ポリシー）』

<http://www.osakac.ac.jp/about/policy/>

2023年6月

教育開発推進センター

寝屋川キャンパスA号館1F

〒572-8530 寝屋川市初町18-8・内線：3129